

# ひかりの中へ

いのちの泉はあなたのもとにあり、  
われらはあなたの光によって光を見る。

『口語訳聖書』詩編第36篇9節



東北学院礼拝説教集 第2号

表紙イラスト ひぐちけえこ

# ひかりの中へ

東北学院礼拝説教集

第2号

2022年3月31日

東北学院宗教センター発行

---

## 目次

◆ 七の七十倍までも赦しなさい 人を赦せない時に	島内久美子……………	6
◆ たくましく育ったキリスト	松井 浩樹……………	10
◆ 愛の祝福	高 アンナ……………	14
◆ キリストの言葉を心に刻む 自分の心と向き合うために	西間木 順……………	18
◆ 人生の四季 成熟した人間になるとは？	大西 晴樹……………	22
◆ 引き網と倉から取り出すたとえ 神様は勧善懲悪なのか？	野村 一信……………	28
◆ 苦悩の中で耳を開いてくださる神 人はなぜ苦しむのか	川島 堅二……………	32
◆ 羊飼いの旅 旅の目的地を目指して	出村みや子……………	40

---



◆ 出会いは思いがけず突然に

あなたにも出会ってほしい

原田 浩司……………

44

◆ 学べることの幸い

学ばないってもつたいない

木村 純二……………

48

◆ パウロからの問いかけ

弱さを感じた時に

吉田 新……………

54

◆ 大いなる恵み

ただでもらえる恵みとは？

田島 卓……………

60

◆ まことの光

闇を照らすまことの光

藤野 雄大……………

66

◆ 常に待っていてくださる神

最初の一步！

渡邊 有美……………

70

◆ コロナ時代こそ礼拝そのもの

礼拝は不要不急？

鐸木 道剛……………

76

◆ 幼子を抱いたとき

死について考える時

佐々木栄悦……………

82

◆ 光のあるうちに

なんのために生きるのか

佐藤 由子……………

90



## 第二号発刊にあたって

『東北学院礼拝説教集』第二号「ひかりの中へ」は、東北学院の各学校の礼拝で語られた説教を収録しています。幼稚園、中学校、高等学校、大学では、短い時間ですが、学校礼拝が毎日行われ、ここでは聖書の教えが説き明かされています。

二〇二一年度は、二〇二〇年度と同様に、コロナウイルス感染症対策のために、各学校の礼拝は教室内へ礼拝の音声を流したり、少ない人数で礼拝堂に集まったり、礼拝撮影動画を配信するなど工夫を凝らしながら学校礼拝を実施いたしました。このような状況下にあっても、礼拝で語られた説教を一冊の小冊子にまとめて発刊できたことはまことに幸いなことと存じます。

園児、生徒、学生だけでなく、保護者の皆様や一般の方々にも本学院が大切にしている学校礼拝での聖書の説き明かしに触れて、「聖書の福音に基づく人格教育」を建学の精神とする教育方針に御理解をいただけますようお願い申し上げます。

なお今回から、より興味や関心をもっていただけるように副題を付けた説教もあります。少しでも分かり易く、お役に立てれば幸いです。

## 副題「ひかりの中へ」について

『東北学院礼拝説教集』第二号は、副題を「ひかりの中へ」といたしました。コロナウイルス感染症が二年を経ても収束せず、気持ち沈み、暗い気分になりがちですが、誰もが明るい未来を抱くことができるように願って付けさせていただきました。

暗い中でも明るさを失わず、未来に明るい希望をもつことは、聖書が繰り返し私たちに求める大切な生き方です。掲載した聖句、「いのちの泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの方によって光を見る。」（『口語訳聖書』詩編第三六篇九節）とは、私たちの見る光は神の光の中で見ると言っています。すなわち、私たちは光を神の光の中で見ているのであり、しかも、私たちが越えた「まことの神の光」に向かう時、私たちの内に神のかけがえのない命の光が見えてくると告げています。

なるほど、現実はいささか塞がれているように見えても、私たちが生かし、支えて下さる神の貴い恵と光を感じ、私たちの心に喜びと感謝の思いが湧いて来るように願っています。本号を読む方々がこの光の一端に触れる時となりますように。



## 七の七十倍までも赦しなさい

幼稚園 園長 島 内 久美子

マタイによる福音書 一八章二一〜三五節

21そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」22イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。23そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。24決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。25しかし、返済できなかつたので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。26家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きつと全部お返しします』としきりに願った。27その家来の主君は憐れに思つて、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。28ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。29仲間はひれ伏して、『どうか待ってください。返すから』としきりに頼んだ。30しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。31仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。32そこで、主君はその家



来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。33 わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』34 それで、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。35 あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。』

ブロックが大好きなA君は、やっと作り上げたロボットをお友だちに見せていました。するとB君がやってきて、そのロボットで遊びたくなり、A君から取り上げてしまいました。そして二人でロボットを引っ張り合っているうちに、壊れてしまいました。壊れたロボットを見てBくんは悪いことをしたと思い「ごめんね」と言いましたが、A君は「絶対許さない！もう一緒に遊ばない」と怒って泣き出してしまいました。

みんなはA君をどう思ったかな？ B君をどう思いますか。

聖書の中でイエスさまがこのようなお話をしています。「自分に悪いことをした人のことは七の七十倍までも赦しなさい」と言われました。

ある王様が家来にお金を貸していましたが、大変困っていてお金を返せないことを知り、返さなくてもいいですよと赦してあげました。しかし、その家来はお金を貸していたお友だちが困っていて「もう少し待ってください」と言ってもお友だちを赦してあげませんでした。王様は「私が赦したようにお前も友達を赦してあげるべきだったと」家来を怒ったお話があります。

王様は神さまのことです。私たちはたくさん間違っています。けれども神さまはいつも私たちを赦してくださいます。もしも赦してもらえなかったら、悲しいですね、どうしていいかわからなくなりますね。赦してもらえから「ごめんなさい」という気持ちになります。赦してもらえからまた楽しく遊べるようになります。七の七十倍というのは「たくさん」「いつでも」という意味です。神さまから私たちはいつも赦されていますから、皆さんもいつもお友達を赦してあげましようと言われています。

ロボットを壊されたA君の悔しい気持ちはわかります。しかし、怒ったままでは楽しく遊べなくなってしまう。神さまは大好きなみなさんに楽しく過ごすことを望まれています。怒った気持ちになったときには「七の七十倍まで赦しなさい。」との言葉を思い出しましょう。

### 《お祈り》

天のやさしい神さま、今日もお天気の朝をくださりありがとうございます。

心が弱くなってけんかをしてしまうことがあります。お友だちを赦してあげられないこともありません。ごめんなさい。神さまがたくさん赦して下さっていることを忘れないで、私たちもお友だちを赦してあげることが出来るよう、心を強くしてください。

今日も一日、幼稚園でお友だちと楽しく遊べますように、お休みのお友だちが早くよくなって幼稚園に来ることが出来るようにお守りください。

このお祈りをイエスさまのお名前を通しておききください。アーメン

互いに親切にし、憐れみの心で接し、  
神がキリストによってあなたがたを  
赦してくださったように、赦し合いなさい。

エフェソの信徒への手紙 4:32



多賀城キャンパス礼拝堂

(撮影：鐸木道剛)



## たくましく育ったキリスト

中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

### ルカによる福音書 二章三六、四〇節

<sup>36</sup>また、アシエル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、<sup>37</sup>夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、<sup>38</sup>そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。<sup>39</sup>親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。<sup>40</sup>幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

「幼な子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」

ごくごく普通の言葉であります。しかしながら、注意深く味わうならば違った見方ができます。マリアという女性から生まれたイエス・キリストは生まれた後「成長をされた」ということです。つまり救い主だからといって生まれた時から、まさに神がかったかのような子供ではなかった。私達と同じく、生まれて知恵をつけつつ、成長をしたという言葉であるのです。

私たちはこのクリスマスという時、家に帰ればケーキが用意され、普段とは少し違う特別な料理も口にするでしょう。かねてより、ほしいと思っていた物も、手に入るかもしれません。ただ、これまで私たちはこの毎朝の礼拝で聖書に描かれるクリスマスの記事を読んできると、私たちの通常に想像するクリスマスとは違う気がしてならないのです。というのは、私たちが一般的にイメージをするクリスマスは、年中行事の中のイベントといえると思えるからです。二五日も過ぎると、すぐにイルミネーションなどのクリスマス用品は撤収されます。代わりに飾り付けるのは正月用の門松やお供え餅へと早変わりをするのです。聖書が語るのは、そういう単なるイベントとしてのクリスマスではありません。教会の暦によるならばクリスマスのは後キリストの苦しみを覚えるレント、つまり受難節に入りキリストが生まれたがゆえの苦難の生涯に思いをはせるのです。そして四月、その十字架の復活を祝うイースターを祝い、またそれから五〇日後には教会の誕生を祝う、つまりペンテコステの礼拝をささげる。そしてまたクリスマスを祝う。つまり、一つのイベントではなく、クリスマスは年間を通してそのキリストの生涯に思いをはせることの始まりであるのです。

今日初めに言いました。その人としてお生まれになったキリストは、はじめから完全な人間ではありません。

せんでした。家畜小屋で生まれ、飼い葉おけに寝かされたに象徴されるように楽しく、幸せではない約三三年の生涯を十字架刑という形で終えるのです。時に、私たちも思います。神はいるのか、悲惨な事件や自然災害などの報道を見ると「神などいない」とも思えるかのような気にもさせられます。その神はいるのか、いないのかに始まって私たちの歩みは、想像以上にもろくはかない歩みであるといえるでしょう。自分の名前すら自分で決められませんし、性別・能力、姿かたちも選べません。つまり私達の歩みには確かなものがないのです。だから悔いのないように一生懸命に生き続ける私達なのです。そしてまた、その生き続けるにあたって一つの支えがイエス・キリストの誕生であり十字架であり、復活であるのです。私達のすべてを知り、守り導き続けられるキリストが今日も私達と共に歩まれるのです。

神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に  
遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、  
逃れる道をも備えていてくださいます。

コリントの信徒への手紙一 10:13



東北学院中学校・高等学校

(撮影：鐸木道剛)



## 愛の祝福

中学校・高等学校 聖書科教諭 高 アンナ

マルコによる福音書 八章二七〜三〇節

27 イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。28 弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだ』と言っていきます。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。29 そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」30 するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。



今日の聖書箇所には、主イエスが弟子たちに向かって、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」とお問いになったということが書かれています。ペトロが弟子たちを代表して、応えました。「あなたは、メシアです」と。

「メシア」とは「香油を塗られた者」「油注がれた者」という意味です。旧約聖書では、王や預言者が神から任命される時に、香油を塗ったことから、メシアという名称が起り、「救い主」を表すようになりました。そのギリシャ語訳が、キリストです。

ところで、「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」「わたしを何と告白するか。」主イエスがこのように質問なさったのは、なぜでしょうか。

面接試験というものがありませんね。経験があると思いますが、大変緊張します。ここでは知識を問われ、人柄が判断され、振る舞いが評価されます。たとえば、この人がこの大学で勉強するのにふさわしいかどうか、あるいは、この会社で働くことができるかどうか見定めます。

主イエスは、勿論、そういう面接試験をなさっておられるではありません。弟子たちがご自分のことをよく分かっているかどうか、神の国にふさわしいかどうかを判断しようとか、試しておられるではありません。そうではなく、主イエスは、信仰の告白を求められたのです。

ある先生が、こんなことを言っています。主イエスは、わたしたちの愛の告白を聞きたいと願っていらっしやるのだ、と。愛し合う者たちは、相手に、「愛している」と言って欲しいと願っている。もうわかりきっているから、言葉に出す必要がないように思われるのに、相手に、今日も、いつも、何回でも「愛している」と言って欲しいものだ。そのような、愛する者同士の、愛の告白に似ているのだ、というので

す。

大胆な比較ですよ。この先生の仰いたいことは、主イエスの問いかけ、それは、わたしたちの知識を試すような冷たい試験ではなく、愛による結びつきを確かになりたい。そういう愛の呼びかけなのだ、という事です。

愛の告白は、こちらが、そう願っていないければ、相手がいくら言ってくれても、愛を告白してくれても、何にもなりません。

ですから、主イエスが「わたしを何と告白するか」と尋ね、告白を聞きたいと願っていらっしゃるということは、実は、主イエスがわたしたちを愛していただくさっているということです。そこで言い表す告白は、決して一人よがりの虚しい告白ではなく、愛されていることを知っている者の喜びと感謝、信頼であり、それは、祝福そのものなのです。

神さまがわたしたちを愛し、主イエスがわたしたちを愛していただくさり、そして、わたしたちから「あなたを愛しています」という言葉を聞きたいと願っていただくさる。

それは、それによって、告白する者を祝福しようと心を傾けてくださっている、ということなのです。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。

わたしはあなたを愛している。

イザヤ書 43:4



東北学院榴ヶ岡高等学校礼拝堂

(撮影：広報課)



## キリストの言葉を心に刻む

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

西間木

順

### コロサイの信徒への手紙 三章一二〜一七節

12あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。13互いに恐び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。14これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。15また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。16キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。17そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

今日から全学年そろって、礼拝を捧げてまいります。昨年度は放送室からの放送礼拝でしたが、今年度は礼拝堂から動画を配信してまいります。

皆さんはどのような思いを持って、新学期を迎えたでしょうか。どのような目標を立てているでしょうか。どのような希望を持っているでしょうか。どのような学校生活を送りたいと考えているでしょうか。

東北学院の建学の精神には、皆さんにどのような人材になっていただきたいのか、ということが書かれています。「聖書の示す神に対する畏敬の念と、イエス・キリストに倣う隣人への愛の精神を培い、文化の発展と福祉に貢献する人材」です。

東北学院は、何よりもこの礼拝の時間を大切にしています。礼拝は神との出会いの場と時です。今この場に、私たちの目には見えませんが、イエス・キリストがいてくださっています。そのイエス・キリストを通して、神と出会い、神の言葉を聞くのです。神は、私たちに、「あなたはわたしにとってかけがえのない存在です」と語ってくださいています。神が私たち一人ひとりをそのまま受け入れ、愛してくださいているのです。神に愛された者として、私たちは、「どのような生き方をするのがいいのか。どういう行動をすればいいのか。」と自分の心と対話しつつ、考えていきたいのです。

先ほどお読みした箇所には、どのような生き方をするのがいいのか、ということが書かれています。

「憐れみの心、慈愛、謙虚、柔和、寛容を身につけなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。…これらすべてに加えて、愛を身につけなさい。愛は、すべてを完成させる絆です。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれ一つとされたのです。いつも感謝していなさい。…」

「なるほど、こういう生き方をすることが、薦められているのか」と理解しますが、実践できるか、というとなかなかできません。このような行動をすれば、「みんながこの学校に来てよかったと思える学校にすることができるとわかっていても、なかなかできません。今までの生き方、行動を変えようと思っても、なかなかできません。

実際、行動するためには、勇気や決断が必要です。その勇気を持ち、決断するためには、自分の心と対話していかなければなりません。繰り返し、繰り返し、聖書を読み、考えていかなければなりません。

神の愛は、私たちを変える力を持っています。神の愛は、私たちに行動を起こす勇気を与えてくれます。その神から愛されていることに気づいたときに、神の愛を正しく受け取ったときに、私たちは、イエス・キリストに倣う隣人への愛を実践していくことができます。そのために、私たちは、イエス・キリストを通して語られる神の言葉を謙虚に聞く者でありたいのです。

今年度の聖句を、一六節の「キリストの言葉があなたがたの内に宿るようにしなさい。」といたしました。キリストの言葉を自分の心の中に刻みなさい、と言うことです。そのキリストの言葉が心の中で響くようになるまで、繰り返し、繰り返し、キリストの言葉を読んでいたきたいのです。その心に刻まれたキリストの言葉が、自分の中で響いてきたときに、神に愛されている者として、イエス・キリストに倣う隣人への愛を身に着け、実践していく勇気が与えられるのです。そして、この学校に連なるすべての人たち、生徒や先生方、職員の方一人ひとりが、この学校に来てよかったと思える学校に共にしてまいりましょう。

〈祈り〉

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり、感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝を捧げることができ、感謝いたします。

この礼拝の中で、イエス・キリストを通して語られているあなたのみ言葉を謙虚に聞くことができるように、私たちの心を開いてください。

あなたのみ言葉を通して、自分の生き方を考えることができますように。この学校に連なるすべての者が、あなたの愛を用いて、互いに愛し合い、今日もこの学校に来てよかったと思える学校に共にしていくことができるように、私たち一人ひとりに行動を起こす勇気を与えてください。

今、この場におりません友のために祈る心を与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この祈り 尊いわれらの主 イエス・キリストのみ名によって御前にお捧げいたします。アーメン



## 人生の四季

院長・学長・宗教センター所長 大西晴樹

### コヘレトの言葉 三章一〜八節

1 何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

2 生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

3 殺す時、癒す時

破壊する時、建てて時

4 泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

5 石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時

6 求める時、失う時

保つ時、放つ時

7 裂く時、縫う時

黙する時、語る時

8 愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。



今日は、皆さんに聖書と心理学について、話してみようと思います。取り上げる聖書はコヘレトの言葉といひまして、聖書の中では、珍しく東洋的な響きをもっている箇所です。たとえば、一章の二節には、「なんとという空しさ、すべては空しい」という言葉が記されています。でも、コヘレトの言葉は、人生には、それぞれになすべき時があることを教えているのですが、大切な点は、自分の力を過信して落胆し、この世の空しさを嘆くのではなくて、神を敬いながら、それぞれの人間が直面するそれぞれの時を大切に過ごすことが、これからの人生を送るにあたって、希望につながると教えていることです。一章の三節で、「人生は空しい」と嘆いていたコヘレトが最後の言葉一二章一三節において、すべてに耳を傾けて得た結論として「神を畏れ、その戒めを守れ」と述べていることから、この点は読み取れます。

さて、今日は、子どもの頃、青年期、成人期、老年期という人生のサイクルを自然の季節の四季にたとえ、「生きる意味」を教えたスイスのポール・トゥルニエの教えに耳を傾けてみたいと思います。トゥルニエは、一九世紀末の一八九八年ジュネーブ生まれ、精神療法を中心とする内科医です。キリスト教信仰と医学の結びつきを明らかにした「人格医学」の提唱者であり、国際人格医学会を創設し、医者と患者の人格的なふれあいを重視した臨床を行いました。一九八六年召天しましたが、一九七七年に来日し、日本各地を講演して歩き、その時の講演集『生きる意味』が出版されています。

トゥルニエの考え方のポイントは、人間を成長・発展においてとらえようとすることであり、人生の目標とは《真に成熟した人間になること》だと、考えている点です。《真に成熟した人間》とはどういう人間かといいますと、《状況に応じて適切な行動をとる能力》をもった《内的に自由な》人間のこと。この《内的自由》、言い換えれば、「自由な心」をもった人間になるには、自分の人生に与えられている意味を

知ろうと求め続け、《真の自分になろう》とする努力が必要だということです。《真の自分になろう》とする努力はなかなか大変なものです。トゥルニエは、またこうもいいます。

真に自由な人間となるには、人生の諸段階を先取りしようと焦らず、かといって、いつまでも前段階に未練を残すことなく、その年齢、その時期なりの欲求や義務に誠実に生き、子どもの頃は服従に学び、壮年期には自立的活動に邁進し、老人に至っては断念を学んで、それぞれの季節ごとに質的に異なる充実を体験することが必要である。またそれぞれの季節を経験しない大人はやっぱりでもある。

私自身の経験でも、成人しているのに、大人に成れない人を見てみると、往々にして、この人は、迷いの多い青年期をそれなりに悩んで過ごしてきたのだろうか、しばしば疑問に思うことがあります。

では、春から夏に、すなわち、大学生として、服従から自立にむかっている皆さんがなすべきことは、何でしょうか。トゥルニエによれば、青年期とは、若い人が「自分自身の実存を十分に自覚する」ようになるべき時期です。つまり、自分は、両親の子どもではなくて、自分自身になる権利があると同時に自分自身になることは義務でもあるということを知覚すべき時なのです。

「自分自身の実存を十分に自覚する」とは、どのようなことなのでしょう。

青年は常に絶対を求めます。青年は人生を白か黒かにはっきりと二つに分けてしか見ることが出来ず、あたかも影をもたない光を見出すことが出来るかのように考えます。それゆえ若い人は、自分自身の気に入らない部分や恥ずかしいと思う部分を自己の内部に認めようとはせず、無意識の中へと押し込めてしま

う傾向をもつのです。すなわち、自分の理想を求めすぎて、自分自身の気に入らない部分や、恥ずかしいと思う部分を自分の内部に認めようとしないのです。逆を言えば、青年期を上手に生きるとは、自分の嫌な部分や弱い部分から逃げずに、それを自覚して、それらを受け入れていくことが大切です。

キリスト教の世界では、自分を絶対化してはならないという教えがあります。聖書には、「義人なし、一人だになし」という言葉があります。どんなに優れていても、どんなに金や地位があったとしても、神の前では、誰一人正しい、絶対的な人間はいないのです。全ての人が自分の嫌な部分や、弱い部分をもっていると考えれば、気持ちが楽になります。恥ずかしいことはありません。自分の影の部分に気づき、影の部分を含めた自分全体を受け入れることによってのみ、自分が人間として完全に開化することができます。

しかし、やがてはすでにこれまでも述べたように、この世では悪も善と分かちがたく入り混じっており、どんなに正しい人でも過ちがないなどということは、ありえないし、徳のひとかけらも持ち合わせていないような悪人などというものはないこと、および自分自身の内部にも善も悪もあること、自分ももっているなどと夢にも思わなかったよい能力や、自分ももっていないと言いつ張っていた欠点が自分の内部に現実存在していることを認めざるを得ない日がやってくるでしょう。そして、自分の影の部分を含めた自己全体を受け入れることによってのみ、自分が人間として完全に開化することができるのだ、ということを得ることが出来る日が来るでしょう。

これから夏を迎える皆さんと異なり、私はもう人生の秋の季節に入り、やがて冬を迎える人間です。しかし、青年期に得た「生き方の方法」によって、仕事である研究や教育を通じて、人生の「夏の季節」を

楽しく過ごすことができました。学問や教育という文化や人間にかかわる職業に就こうと考えたのは、青年期の情熱ゆえです。その時に私はさして優秀ではありませんでした。しかし、研究や教育の世界で生きていくには、生来勤勉ではなく、出来るだけ失敗を他人や社会のせいにしていくような、自分自身の嫌な部分や弱さを引き受けていかざるをえません。そして、その弱さや、邪悪さを克服していくには、やはり、コツコツと実績を積み重ねていく以外にないという考え方を身に付けました。「学問に王道なし」です。それは私の場合、毎週日曜日に教会で聖書を読み、牧師の説教を聴き、仲間から励ましをえて、研究に誠実に打ち込み、専門家がつ狭い視野にとらわれずに、人生を豊かに充実させるという方法を繰り返すことでした。だからこそ、こうして人生の秋まで何とかやってこられたのではないかと思うのです。実は、三年前のことですが、四十代前半で出版した博士論文以外に、書き残してきたテーマについて研究書を出版することができました。東京の大学の学長を終えて心身ともに抜け殻状態でしたが、再開した研究と、若い時に書き残してきた研究論文とが次第に重なってきて、一つのテーマのもとに一冊の本にすることが出来たのです。若い時は、書き散らしてきた論文が本になることなど夢想だにしませんでした。この喜びはひとしおでした。やはり、自分の嫌な部分や弱さを引き受けて、仕事に誠実であったことが、思いがけず実を結んだのです。

最後に、自分自身の嫌な部分や弱さの克服はどのようになされるのでしょうか。私は、皆さんに他者とかかわりや、他者を肯定すること、および、自分がしばしば他者よりも弱く、他者に劣らざるを得ない場合もあるのだという言葉を肯定することを勧めます。それは、どんな時に分かるのかと言いますと、ずばり人間が一对一で向き合う恋愛です。具体的には、恋人との関係です。神は「人がひとりであるのはよ

くない」といわれて、私たちにしばしば、彼氏、彼女を与えられます。恋人と一緒にの時をもてるのは嬉しくて、幸いなことです。でも、他方では、一緒にいることによって、互いに適応しなければならぬという課題が課せられます。そしてその際、自分が降伏してしまうか、また相手を屈服させてしまうかの、いずれかによって葛藤を回避することは、一方が相手に完全に順応してしまつて、自分の自立性をまったく失っている状態なのです。こういう二人の間には活気がなく、二人だけの殻に閉じこもつてしまい、外の世界に適応することが出来ないのです。しかし、親から離れて自立していくためには、二人の葛藤は、互いに自己克服によって真に解決されなければならないのです。つまり、神はほんとうの意味で、成熟することを要求され、そのように人間に仕向けられたのです。

青年期。これから夏を迎える皆さんには、自分の嫌な部分や弱さから目を背けるのではなく、また、自分の隣にいる人の話に静かに耳を傾け、聖書の言葉に耳を傾け、祈ることをお勧めします。これらの態度こそが、人格の成長と真の成熟に至る最初の手がかりであり、奥義そのものでもあるのだということを手でもらえたら幸いです。



## 引き網と倉から取り出すたとえ

大学宗教部長・宗教センター主任 野村 信

マタイによる福音書 一三章四七〜五二節

47 また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。48 網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。49 世の終わりに投げるのである。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、50 燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

51 「あなたがたは、これらのことがみな分かったか。」弟子たちは、「分かりました」と言った。52 そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」

この礼拝堂においてすでに、宝が隠された畑のたとえと、高価な真珠のたとえについては語りましたので（第一号に掲載）、そのあとの二つのたとえについて説き明かしたいと思います。

四七節以下のたとえです。一つ目は引き網漁をするたとえであり、もう一つは、倉の中から必要に応じ

て新しい物と古い物を取り出す主人の話です。

ペトロやアンデレといった主イエスの弟子たちは、みな漁師でした。ですから、このたとえは実に身近で分かりやすいたとえだったはずで、船から網を降ろして魚を釣り、魚がたくさん釣れたら、それを轆（わ）いていて、陸に上げて食べられる魚と食べるにふさわしくない魚を選り分けたのです。この作業をとおして、いわゆる終末における神の裁き、最後の審判が告げられています。正しい人間たちの中から、悪人が引き出されて火の中に投げ込まれて罰せられるというわけです。

ここから、イエス・キリストは、はっきりと正しさを奨励し、悪は退けられるお方であるということが分かります。キリストの清さ、正しさを知り、それゆえ悪や不正に対するキリストの罰を私たちは心に留めなければなりません。このような教えは福音書の中に何度も登場し、白黒がはっきりしているわけです。

しかし、これはたとえ話ですから、ある程度幅のある、多様な解釈があつてよいわけです。そこでもう少し深読みしたいと思えます。それは、このたとえには後日談があると云えます。すなわち、こうして釣れた魚を引き出してみたら、実は、どの魚もどこかに欠けのある、口にできる魚ではなかった、すなわち天の国に入れる人間はいなかった、というのがキリストの見た人類の本当の姿でした。

なぜなら、これを語ってくださった主イエス・キリストは、この後、十字架にかけられて処刑されました。それは何度か耳にしていると思えますが、その死をとおして、人類の罪を赦し、悪を清め、神の前に立てない私たちのために執り成してくださいというのが、この十字架のもつ意味です。さらにキリストは復活することによって、新しい命を人類に提供してくださいました。キリストの教会は、十字架と復活の出来事を福音と呼んで、これを語り伝える宣教を開始しました。

つまり、福音とは、全く誰も想像していなかった、神の人類への新しい働きかけであり、この福音によって人類を救うという新しい約束が到来したのです。ですから、これは新しい教えなのです。新しい宝であります。

五二節に、倉の中から必要に応じて新しい物と古いものを取り出すという一家の主人の話があります。この倉という言葉は、原文のギリシヤ語では、宝の倉、宝庫という意味です。なるほど、一家の主人は、自分の宝の倉から、古い宝は捨てて、新しい宝を取り出すというわけです。その新しい宝とは、主イエス・キリストのもたらしてくださった人類の救済、すなわち福音を指すのであり、新しいというこの言葉は、新しい約束、すなわち新約聖書を指しています。

確かに、引き網漁によって、良い魚と悪い魚を選び分けるようにというたとえは、単純には、善人は天の国へ入り、悪人は地獄に落ちるといふ、勧善懲悪的理解な教えに聞こえますが、勧善懲悪なら、別にキリスト教だけが語っているわけではなく、一般的な理解であり、新しいものではありません。

新約聖書の手紙を書いた伝道者パウロは言います。「正しい者はいない。一人もいない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。」(ローマの信徒への手紙三章一〇節以下)と。パウロについては、すでに知っておられると思いますが、かつてキリスト教徒を捕縛していた恐るべき迫害者でありました。そのパウロがキリストの伝道者となり、地中海の東地域を三回も巡り歩いて福音を伝える働きをしました。その時に、自分も含め人間はなんと愚かしく、罪深く、不正に満ちているかを実感したのです。同時に、福音はなんと恵み深く、あわれみに富んだものかをはっきりと自覚しました。



ペトロというキリストの第一弟子は、三度もキリストを否み、自らの愚かさをしみじみと実感した後、人々の前に出て、告げた言葉は、「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです」でした。これがキリスト教会の最初の説教と言われています。ペトロは後に、「キリストは罪のために死なれたのです。正しい方が正しくない者たちのために苦しまれたのです」と手紙の中で語っています。

ヨハネと言う弟子も、「自分に罪がないというなら、自らを欺いており、真理は私たちの内にはありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義から私たちを清めてくださいます」と手紙で語っています。

このように聖書全体を読んでもみますと、この二つのたとえは、非常に大切なことを私たちに告げていることに気がきます。すなわち、厳しい神が、憐れみ深く私たちを受け入れようとされていると思わずにはおれません。

しかし、最後に、誰かがこう言うかもしれません。「それでも、結局キリスト教は、勧善懲悪を語る宗教でしょう」と。そうです。キリスト教は勧善懲悪を語る宗教です。だからこそキリストは人類のために死んで下さったのであり、そういう点で、恵みと憐れみに満ちた勧善懲悪をもっており、私たちは赦された者として再び世界へ大胆に向かっていきます。何度失敗しても、過ちを犯しても、十分に償っていただけキリストの恵が先行しています。

今私たちは、困難な時代を過ごしていますが、困難な中であっても幸いの中にあっても、このかけがえない宝、新しい約束を私たちは心に留め、確かな歩みを進めていきたいと願います。



## 苦悩の中で耳を開いてくださる神

大学総合人文学科長

川島 堅 二

ヨブ記 三六章一五節

<sup>5</sup>神は貧しい人をその貧苦を通して救い出し  
苦悩の中で耳を開いてくださる。

ローマの信徒への手紙 五章三〜四節

<sup>3</sup>そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、  
<sup>4</sup>忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。  
<sup>3</sup>そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、  
<sup>4</sup>忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。

## 一・ヨブ記について

ヨブ記は一見、ドラマ、演劇の台本のように書かれている。神、サタン、ヨブとその妻、息子、娘たち、召使、ヨブの三人の友人と謎の人物エリフという登場人物たち、彼らによって織りなされる生き生きとした対話で全体が構成されている。しかし、一度でもヨブ記を通読すれば、そうした期待は裏切られる。

ヨブと登場人物との対話は、しばしばかみ合わず、一方的な自己主張に終始することもしばしばで、最後は神様の登場で決着はつくのだが、なぜ決着したのか、ということがすっきりと分からない。モヤモヤが残るのである。

そもそもヨブ記は、古代ギリシアの「悲劇」のように舞台上で上演されることを前提として書かれた脚本ではない。旧約聖書時代のユダヤ人たちは演劇活動ができるほどの充実した市民生活、都市文明を享受したことはなかった。また、ユダヤ教の信仰（不可視の唯一の神に対する絶対的信仰）も、演劇のような視覚芸術に有利な状況を作らなかった。この点では新年祭で演じられたといわれる古代バビロニアの創造神話「エヌマ・エリシュ」と対照的である。ヨブ記は、理由なき理不尽な苦難という主題について、さまざまな考え方、受け止め方を表白している文学作品ではあるが、ストーリーの整合性や首尾一貫性という点で完成度の低い作品である。しかし、それゆえにこそ、このテーマについての生き生きとした素材があちこちにダイヤの原石のようにころがっており、読む者に多くのインスピレーションを与えてきた作品でもある。

## 二・三人の友人―ユダヤ的価値観の体現者

### 事の起こり

「ウツの地にヨブという名の人があった。この人は完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけていた」(一・一)

ヨブの完全性はまずその財産によって表現されている。七人の息子と三人の娘(合計十人の子供)、羊七千頭、ラクダ三千頭(合計一万頭)、牛五百頭、雌ロバ五百頭(合計千頭)、いずれも完全数だ。ヨブの完全さは所有だけではない。「神を畏れ」(理想的な信仰) しかも「悪を遠ざけていた」(道徳的にも非の打ち所がない)。

普通は金持ちだが、性悪で神を畏れない不屈きものだとか、家族には恵まれているが貧乏だとか、何か欠けがあるものだが、ヨブにはそれがない。完全に絵に描いたような幸せ者、それがヨブである。

ところがこのヨブを悲劇が見舞う。サタンに唆された(としか言いようがない)神によって、まずすべての財産と妻以外の家族が、近隣部族による略奪と自然災害によって奪われる。さらに災いはヨブの身体にまで及び「足の裏から頭の頂まで、悪性の腫物」(二・七)ができ、吐く息は臭くなり、ついには妻からも「神を呪って死んでしまいなさい」と見捨てられてしまう。

ヨブがとんでもない災難に見舞われたと知った三人の友人たちがヨブを見舞うが、その変わり果てた姿を目にして、言葉を失い、七日七夜、ヨブと一緒に無言の時を過ごす(友人にも恵まれていたヨブ)。かける言葉も見いだせないまま時は流れたが、ヨブが自分の生まれた日を呪い、死を求めるに至って、ついに友人たちが口を開く。三人の友人たちは、若干の観点の相違はあるものの、いずれも旧約聖書、古代ユ

ダヤ教の考えに基づいて、この災難の原因はヨブにあること（因果応報）、ヨブにその心当たりはないかと迫る。

友人エリファズ

エリファズは古代ユダヤ教（旧約聖書）の伝統的価値観を体現した人物である。

「思い起こしてみよ。罪がないのに滅びたものがあつたか。正しい人で絶ち滅ぼされたものがどこにいたか。…不義を耕し、労苦を嗜く者はそれを刈り取っている」（四・七〇八）

友人ビルダド

エリファズの因果応報に加え、試練の時の心の持ちよう、過ごし方を助言する。

試練の嵐で花はしぼみ、枝も折れ、葉も枯れてしまい、芽を出そうにもそれができないときは、上に伸びよう外に拡がろうとしても無理である。こういう時こそ地下に根を張り、基礎固めをせよ。やがて時が巡ってくれば以前に増して芽吹き、花を咲かせ、豊かな実りの時を迎えるだろうとヨブを励ます。（八・一七〇二一）

しかし、この言葉もヨブを慰める（納得させる）ことはできない。上も下も同じだ。もう「根を張る」力も出ないほど、自分は生への希望を失ってしまっている。わたしが不当な苦しみにあっていることを認めよと迫る。（九章）

友人ツォファル

不当を訴えるヨブに対して、神の基準と人間の基準とは異なる、人間の基準で潔白を主張したとしてもそれが神の基準に適うとどうしてわかるのかと、ヨブの知恵のなさを責める（一一・四〇九）

このようにユダヤ教（旧約聖書）の伝統的な信仰、知恵に基づく説得、すなわち、この災いの原因はヨブにある（因果応報）のだから、それを認め悔い改めよという立場でヨブの三人の親友たちは説得を試みるのだが、それはいずれも失敗に終わる。

古代ユダヤ教に限らず、現代にいたるまで多くの宗教が人の不幸（災禍）を「因果応報」で説明してきた。それは「理由なき不幸」に人は耐えられない。一時的とはいえ、不幸の原因が分かるといっただけでも救いになる場合があるからだ。「宗教は民衆のアヘン（痛み止め）」とマルクスは言ったといわれるが、根本的な解決にはならなくとも、一時的な痛み止めとしての宗教の教えが「因果応報」なのかもしれない。しかし、ヨブはこのような「痛み止め」で「救われる」ことはなく、自らの問いを友人たちに、そしてついに神に向けて迫る。

### 三・四人目の友人エリフ―真打登場

四人目の友人として登場するエリフが何者なのかはよく分からない。そもそも、最初の場面で登場する友人は三人であり、エリフの名はそこにはなかった。先行する三人に比べて若輩であるゆえに、今まで沈黙していたが、三人の友人がヨブを説得できなかったので、やむにやまれぬ思いで口を開いたという設定である。（二三章以下）

先行した三人の友人の説得には一つ一つ反論したヨブであったが、このエリフの言葉には反論がない。したがって、このエリフによってヨブはある程度説得されたとも解せる。「不条理な不幸」に対するヨブ記の著者の主張、考えが表されているとも言える。

先行した三人の友人たちとエリフの決定的な違いは、苦難の積極的な意味を説いていることである。三人の友人にとって「苦難」は罪に対する神の罰という消極的な意義しかもたなかった。しかし、エリフは次のように語るのである。

「神はその苦しむ人をその苦しみによって救い、彼らの耳を虐げによって開く」(三六・一五)

「苦難を経なければどんなに叫んでも、力を尽くしても、それは役立たない」(三六・一九新共同訳)

「苦難」には「罰」のような消極的な意味ではない、「耳を開く」「救い」に通じる積極的な意義があるというのだ。

キリスト教学の授業でヨブ記を読んでヨブの友人になってヨブを見舞う言葉を考えさせるという課題を毎年出している。多くの学生は先行する三人の友人たちと同じような「因果応報」「懲らしめ」せいぜい「成長のための試練」といった解釈で言葉を考えるのだが、時々、教員のわたしをうならせるような言葉を書いてくる学生がいる。たとえば

「神は苦しむことを知っておられる方である。ヨブは家族も財産も信仰もパーフェクトで、すべてを持っているようだが、一つ欠けた点がある。それは苦しむことを知らない人生だったということ。この苦難の経験は、ヨブが苦しみを知る神に近づくためのもの」

#### 四・苦悩の中で耳を開いてくださる神

「神はその苦しむ人をその苦しみによって救い、彼らの耳を虐げ(苦しみ)によって開く」というエリフの言葉、それは苦難を、犯した罪に対する罰とか、知恵のなさといった消極的な原因に帰するのではな

く、その経験によって、これまで見えなかったものが見え、聞こえなかったもの（神の姿、神の言葉）が聞こえてくるといふ苦難の積極的な意義をわたしたちに示している。それはまた新約聖書のパウロの苦難についての理解につながるものでもある。

「そればかりでなく、苦難をも誇りとしています。苦難が忍耐を生み、忍耐が品格を、品格が希望を生むことを知っているからです」（ローマの信徒への手紙五・三〜四）

パウロは苦難は希望につながるものであるゆえに、恥じるのではなく誇るべきことだと述べ、これに積極的な意義を認めている。

私たちキリスト者はイエス・キリストの苦難の象徴である十字架を私たちの宗教の中心的な旗印として掲げているが、十字架とは元来は犯した罪に対する罰としての極刑（刑罰）に他ならなかった。それに対し、イエス・キリストの十字架はわたしたちが神とつながるための、神による救いの業の完成という新たな意味を見出したところから、キリスト教は出発した。



わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。  
うろたえてはならない。おののいてはならない。  
あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。

ヨシュア記 1 : 9



東北学院大学泉キャンパス礼拝堂  
(撮影：広報課)



## 羊飼いの旅

大学宗主任 出村 みや子

### 詩篇 二三編

1 賛歌。ダビデの詩。

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

2 主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴ひ

3 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく

わたしを正しい道に導かれる。

4 死の陰の谷を行くときも

わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖

それがわたしを力づける。

5 わたしを苦しめる者を前にしても

あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ

わたしの杯を溢れさせてくださる。

6 命のある限り

恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り

生涯、そこにとどまるであろう。

コロナ感染拡大のニュースが世界中を駆け巡った昨年の春、私はカミュの『ペスト』を久々に読み直しました。また授業の教科書に指定しているソポクレスの『オイディプス王』のテクストについても、これまで読み飛ばしていた冒頭箇所が、疫病蔓延のための市民の嘆願から始まることの意味を考えるようになりました。また聖書にも出エジプト記やヨブ記などに疫病や病の記事がありますね。私たちは日々の大学生活において、人類がそれまで蓄積してきた知恵を学び、専門諸科学の学びを通じて新たな創造に結びつくような知的かつ論理的な思考の訓練を大切にしています。キリスト教主義大学の教育はそれにとどまらず、目に見えない形で人生についての深い思索を日々積み重ねていると言えましょう。

本日選びました聖書の箇所は、羊飼いの旅をテーマとした旧約聖書の詩編二三篇です。この詩編は、神を信じる者の人生の歩みを導く神の恵みの豊かさと確かさを讃え、歌っている美しい詩編です。私は学生時代にこの詩編と出会って以来、人生の様々な局面で思い悩んだ時に、この詩編の言葉を思い起こしては多くの示唆を受け、励まされています。わたしたちの人生に思いがけず訪れる様々な困難や、誰しもが避けることのできない死の問題を含めて、聖書のみ言葉は私たちにとつて確かな人生の道しるべとなります。個人的なことになりますが、一月に長らく介護していた九一歳の母を神様の御許に送りました。告別式の際に母の好きだった聖句として選んだのがこの聖書箇所でした。この聖句のお影で母も私も人生の確かな導きを受けることが出来ましたので、本日はこの詩編からご一緒に学びたいと思います。

最初の一節から三節をご覧ください。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主は私を青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる」と高らかに歌われています。ヨーロッパを列車で旅すると、豊かな牧草地が延々と続き、あちらこちらで羊や牛がのんびりと草をはんでい

る風景に出合います。現代人はこの詩編にもそのような牧歌的な風景を重ねがちです。しかしこの詩編は、パレスチナの厳しい自然風土と過酷な羊飼いの状況を背景として成立していることにまず注意することが大切です。

パレスチナの土地は荒れ野が多く、南部のユダ地方は夏になると暑さのために羊に食べさせる牧草が無くなってしまいます。そこで、羊飼いは南方から北へと向かい、ガリラヤ地方などの牧草のある地方へと旅立ちます。そして冬になると牧者は再び羊を南方に連れ戻します。この旅は決してたやすいものではなかったでしょう。羊飼いは羊たちが疲れ果てないように絶えず注意しながら、水と牧草のあるところまで無事に辿り着かなければなりません。荒涼とした岩山の多い古代パレスチナを進む旅ですから、途中で迷うことなく安全な道を進まねばなりません。特に夜には野の獣に襲われないように気を配り、時には盗賊の襲撃にも備えなければなりません。羊飼いにとっては苦勞の多い大変な旅だったことでしょう。四節には「死の陰の谷を行くときも」とありますので、旅の途中でその命が脅かされるような災いに出会うこともあったでしょう。また五節には、「私を苦しめる者を前にしても」とありますから、羊飼いはよるべない旅の途上で様々な生命の危険にも直面したでしょう。

しかし、こうした危険と隣り合わせの羊飼いの旅を舞台としたこの詩編ですが、驚くべきことに一貫して神の恵みと慈しみへの信頼が溢れています。なぜならここで歌われている羊飼いの姿には、羊たちを青草の原まで無事に導き、乾ききったその魂に十分な休息を与えて生き返らせて下さる主なる神がイメージされており、この羊飼いの導きを信じて歩む生活には何ら不足がないと語られているからです。

続いて四節以下をご覧ください。この詩編には羊飼いの旅に仮託して、神を信じる者の人生の歩みが歌

われていることがわかります。私たち一人一人の人生には、「死の陰の谷」としか表現しえない、暗く望みなき状況に身を置くことが時にあるかもしれません。しかしそうした絶望的状况にあっても、詩編の詩人は「あなたがわたしと共にいてくださるから」、どのような災いも恐れな、と力強く述べています。ここに登場する「あなたの鞭と杖」とは、牧畜民が群れを導き、猛獣から群れを守る武器として用いられていたものだそうです。

また五節には、豊かな食卓が用意される場面が描かれています。ここには、旅人、特に追われている者を歓待し、その身の安全を守る遊牧民の生活倫理が反映されていると言われています。さらに六節の「命のある限り、恵みと慈しみはいつも私を追う」との一節に注目してください。ここでは「恵みと慈しみ」が擬人化されていますね。「恵みと慈しみ」がここでは羊飼いを助けて羊の移動を守り導く賢い猟犬のように、詩人の歩みを忠実に追ってくるのだと語られています。そして最後に、こうした詩人の人生の旅の出発点と目的地は、「主の家」に帰り、そこにとどまることであると告げられています。詩人は、人生の旅が終わるところ、その目的地である主の住まうところにこそ、主によって造られた私たち人間の魂の真の安らぎの場であると告げているのです。

皆さんの中には今年度をもって社会に旅立つ四年生もおられることと思いますが、今後の学生の皆さんの人生の歩みが守られ、恵みと祝福に満ちたものとなることを心から願っています。



## 出会いは思いがけず突然に

大学宗教授任 原田浩司

### マタイによる福音書 四章一八〜二二節

18 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20 二人はすぐに網を捨てて従った。21 そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。22 この二人もすぐに、舟と父親を残してイエスに従った。

今日の聖書は、ペトロとアンデレの兄弟、ヤコブとヨハネの兄弟の四人がはじめてイエス・キリストと出会った場面です。特に一年生の皆さんの多くは、この東北学院大学に入学して、はじめてキリスト教に出会った、つまり、これまでキリスト教については知識や一般常識で知ってはいたけれども、入学して実際に自分の手で直に聖書を受け取り、聖書を学ぶという必修科目の講義を受けるなどして「リアルに」キリスト教に触れた学生が大半ではないかと想像します。人生初の「キリスト教との出会い」について、特に新入生の皆さんはどのような感想を持っているでしょう。

聖書は数々の「出会い」で満ちています。出会いから新しい次のドラマが始まります。キリスト教というのは「出会いの宗教」とでも言うくらい、出会いそのものが鍵となります。今日の聖書に登場した四人も出会ったんです。ついに会ってしまふのです。そして、そこから新しいドラマが始まるのです。出会いから、彼らの新しい人生が始まっていきます。彼らは「イエス・キリストと出会い、そして、その出会いから、これまでまったく予想だにしない人生が始まります」。

これまでの彼らは四人とも「漁師」として毎日湖に漁に出て、獲った魚を売って生計を立てていました。それがこの四人の毎日の暮らしでした。きっと明日も一か月後も、一年後も十年後も、彼らはこれまでも通り、何も変わらず、ガリラヤ湖に船を出しては漁にいそしんでいたでしょう。しかし、それはイエス・キリストと出会うまでの彼らの人生でした。

東北学院大学での四年間の生活も「出会い」が重要な鍵となります。新しい学問との出会い、新しい知識や技術（テクノロジー）との出会い、新しい情報との出会い、新しい教員との出会い、そして、新しい友人や仲間、先輩たち、また後輩たちとの出会い、また新しい恋人との出会いなどもあるかもしれません。

しかし、まさにこれまで過ごしてきた一年半の間、学生である皆さんだけでなく、日本中、世界中の人々が、「出会い」の機会が制限されてきました。「ソーシャルディスタンス」、「三密を避ける」、「リモート授業」、「会食の自粛」など、人と人が出会う機会をできるだけ少なくする、できる限りなくしていくことに注意が払われてきました。こうして、大学の礼拝堂も、学生同士だけでなく、教職員を含め、接触を制限するために、動画配信によるリモート礼拝だったり、入場制限を設けた少数の対面礼拝だったり、対策を講じて行われています。例年よりも大幅に少ない礼拝参加者となっています。わたしもまた、学生の皆さんと、直接に顔と顔を合わせて会う機会が制限されています。

「出会い」に注目しながら改めて聖書を丁寧に読んでみると、気付かされることがあります。たとえば、今回の聖書箇所に出てきた四人の漁師たちは、自分たちの方からイエス・キリストに会いに行ったのではなくありませんでした。思いもかけず、突然に、イエス・キリストの方から四人に出会いに来たのです。そして「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう」との呼びかけに、彼らは思いもかけずに応答し、イエスに従っていきました。

東北学院大学はキリスト教の学校ですので、一年時には「聖書を学ぶ」という講義があり、大学礼拝があります。ただ「ある」というだけでなく、聖書も礼拝も大切なこととして重んじているのが東北学院大学です。皆さんの方からキリスト教との出会いを求めたわけではないかもしれませんが、ですが、見方を変えてみれば、キリスト教の方から、キリストの側から、皆さんに会いに来てきた、イエス・キリストが皆さんとの出会いを求め、皆さんの前に現れた、と考えることができるのかもしれませんが。東北学院大学での学生生活とおして、イエス・キリストが、イエス・キリストの方から、思いがけず、皆さんに出会



いに来るのです。これはとても不思議な、あるいは奇妙に聞こえるような話だと思われるかもしれませんが、この大学は、他の大学と違う大きな特徴があるとすれば、キリストと出会う大学だということです。大学礼拝をおして、聖書をおして、キリストは皆さんと出会います。キリストと出会う大学だということは、大学礼拝を大切に行っている大学だということなのです。これまで月曜日から土曜日まで毎日行われていた大学礼拝も、現在のコロナ禍のため、週に一度、月曜日だけに制限されていますが、是非、この大学礼拝に参加してください。

今日の聖書に出てきた四人の漁師は、キリストとの出会いによって、そしてキリストに応答することで、新しい人生が切り開かれました。彼らは後に「使徒」と呼ばれるようになり、今日では世界中にその名前が知れわたる人物となりました。彼らだけでなく、聖書には数々の、キリストとの出会い、神との出会い、そしてその出会いの中で、人生が切り開かれていく人たちのドラマで満ちています。あなたもきっとその一人なのです。学生である皆さんも、これからどのような人生が切り開かれていくのでしょうか。

未だにコロナ禍のただ中にありますが、特に入学されたばかりの皆さんには、東北学院大学の学生として、学問の研鑽に励みながら、キリストと出会うことをおして、あなたの人生のドラマがどのように切り開かれていくのか、楽しみながら、期待をもつて学生生活を過ごしていきましょう。皆さんの学生生活の上に、キリストの豊かな恵みがありますように。



## 学べることの幸い

大学宗教学主任 木村 純 二

マタイによる福音書 一三章一六〜一七節

16 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。17 はつきり言っておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。

さて、今日の聖書箇所は、みなさんお持ちの『新共同訳聖書』では段落の初めに「たとえを用いて話す理由」と見出しが付けられています。弟子たちがイエスに「なぜ、集まった群衆たちにとえを用いて話をするのですか？」と尋ね、それにイエスが答えている場面です。それは彼らが「見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからだ」とイエスは答え、また、そのことはすでに預言者イザヤによってあらかじめ示されたことでもあったと言います。

イエスが言及しているのはイザヤ書の六章九、一〇節で、ここでは、見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないのは「心が鈍っているからだ」と説明されています。要するに、そのことに対して心を閉ざしてしまい、興味も関心もなく、自分に関わりのあることだと思わない。だから、目で見て耳で聞いてはいても上滑りして、右から左に流れて行ってしまうということかと思えます。

群衆たちはそのように右から左へと聞き流してしまっているが、その言葉は多くの預言者たちが見たかったけれども見られず、聞きたかったけれども聞けなかったものなのだというのが、先ほどお読みした箇所でのイエスの発言になります。

私はこの箇所を読むと、いつも一人の人が心に浮かんで来ます。今から二十年ほど前、私が初めて大学教員になった時、この東北学院大学に着任する前に勤めていた別の大学での話ですが、科目履修の聴講生として授業に出ていたお婆さんがいました。当時すでに七十歳を越えていましたが、毎学期二つ三つの科目を登録して、もう十年以上も大学に通い続けていたそうです。シェークスピアを取り上げた英文学の授業や、杜甫や李白の漢詩を扱う中国文学の授業、その他、歴史や哲学など、いつも一番前の席に座って熱心にノートを取り、予習も復習もバッチリこなして授業に臨んでいました。私の授業でも、授業中や終

わった後に熱心に質問されるので、たびたび話し込んでいるうちに、これは一度学生たちにも話を聞かせる機会があるとよいと思い、自分のゼミにそのお婆さんをご招待して色々とお話を伺いました。

おそらく昭和一桁の生まれだと思うのですが、子どものころはずっと戦争が続き、戦争が終わっても貧しい生活の中、日々暮らしていくのが精いっぱい、とても勉強どころではなかった。もともと本を読むのは好きで、勉強も好きだったのだけど、働かなければならず、上の学校に行けなかったので、小学校で自分よりも成績の悪かった友達が女学校に通っているのが悔しくて、また羨ましくて、本当に辛かった。いつかちゃんと勉強したいと思いつつながら、結婚して育児に追われ、ようやく五十歳を過ぎてから定時制高校に通うことができ、その後大学にも科目履修生として通い続けている、とのことでした。

その方は、自分の知らないことを学ぶのは本当に楽しく、幸せだとおっしゃっていました。自分が生まれる何百年も前に、こんなにも深くものを考え、優れた作品を残した人がいるなんて驚きで、それを知らずに生きてるのは本当にもったいないことだ。世の中には、まだまだ自分の知らないこともたくさんあるのだから、生きていく間に少しでも多くのことを学びたい。そうもおっしゃっていました。そして、学生に対して、「あなたたちが若いうちから大学で学べるのは、本当に素晴らしいことだから、存分に学んでほしい」と伝えていました。

みなさんはどうでしょうか？ 大学に進学して、このお婆さんのように心からの喜びをもって学べているでしょうか？ 「こんな授業を学んでも就職してから何の役にも立たないし、とりあえず単位だけ、なるべく楽しんで取ればいいや」などと考えて、授業に臨んでいることはないでしょうか？ 東北学院大学は総合大学で、職業訓練のための専門学校ではありませんから、就職後の職業に役立てるために学んでいる

わけではありません。もっと幅広く、人生そのものを豊かにするための学びです。

今の日本では戦争はありませんが、経済的な格差が広がり、大学に通いたくても通えない人がいます。世界に目を向ければ、貧困や紛争などでまともに教育を受けることのできない子どもたちも数多くいます。せっかく大学で学ぶという恩恵にあずかっているのに、自分自身が心を閉ざしてしまっていたら、授業を見たり聞いたりしていても何も身に着かずに終わってしまいます。

特にキリスト教の授業は、「別にキリスト教を学ぶためにこの大学に来たわけではないし、キリスト教徒ではないから自分には関係ない」といって、心を閉ざす理由を簡単に挙げることができてしまいがちです。しかし、多くの場合、自分がやらない理由として挙げた事柄は、逆に自分がやるべき理由に転ずることができません。つまり、「今まで特に機会がなく、キリスト教について何も知らないから、この機会に学んでみよう」と考え、心を開き、前向きに取り組むことだってできるはずなのです。すべては自分の態度次第です。

本日の聖書箇所をもう一度読みますので、ここまでの話をふまえて聞き直してみてください。

「あなたがたの目は見ているから幸いだ。あなたがたの耳は聞いているから幸いだ。はっきり言っておく。多くの預言者や正しい人たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見る事ができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

さて、大学での学びについてはこのくらいにして、聖書に話を戻しましょう。イエスが言っている預言

者や正しい人たちが「聞きたかったが聞けなかったこと」とは、いったい何を指しているのでしょうか？ 『旧約聖書』に「コヘレトの言葉」という文書があります。コヘレトはこの世のすべてが「空しい」と語ります。知恵を追い求めても、快楽を追い求めても、すべては空しいと言うのです。自分は知恵を追い求めたが、結局この世では賢者だけに特別な祝福があるわけではなく、愚者と同じことが起こるようである。だとすれば、知恵を求めることは無駄で空しいことではないかというのがコヘレトの主張です。コヘレト九章一節から三節では、「人間の前にあるすべてのことは何事も同じで、同じひとつのことが善人にも悪人にも臨む」と言い、「太陽の下に起こるすべてのことの中で最も悪いのは、だれにでも同じひとつのことが臨むこと」だと主張しています。要するに、せっかく正しく生きてとしても、結局最後は悪人と同じ結果になるなんて最悪だ」と悪態をついているわけです。

一方、イエスは「マタイによる福音書」に載せられた「山上の説教」の中で、こう教えています。「天の父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さる。だから、あなたがたも敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。善人にも悪人にも同じように太陽が昇り、雨が降る。だからこそ、天の父なる神はこの上なく恵み深い方なのだ、とイエスは語っているのです。

私は、この言葉こそ、コヘレトが聞きたかったのに聞けなかった言葉だという気がしてなりません。「善人も悪人も同じである」ということを、コヘレトは「最悪なこと」としか見ることができなかつたのですが、イエスはそのに神の恵みを見ることを教えています。先ほど、自分がやらなくてもよい理由として挙げていた言い訳は、自分の態度次第で、自分がやるべき理由に転じることができると言いました。ここでも、コヘレトが「最悪なこと」として挙げている事柄を、イエスはそっくりそのまま反転させて祝福とし

て受け取ることができると教えているのです。

東北学院大学に通うみなさんは、こうして聖書の教えを見ることができ、聞くことができています。だから「幸いだ」とイエスは言っています。それを実際に幸いとして感じるか、つまらない無駄なことだと感じるかは、心を開くか、心を閉ざしたままでいるか、みなさんの態度にかかっています。ぜひ、みなさんが心を開いて、この大学で、そして大学礼拝やキリスト教学の授業で、多くのものを学んでくれることを願っています。



## パウロからの問いかけ

大学宗主任 吉田 新

コリントの信徒への手紙一 一二章一四～二六節

14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。19 すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。21 目が手に向かつて「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かつて「お前たちは要らない」とも言えません。22 それぞれどこか、体の中でほかよりも弱く見える部分があるが、かえって必要なのです。23 わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもつと見栄えよくしようします。24 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。25 それで、体に分裂が起こらず、各部分



が互いに配慮し合っています。26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

今回のコロナ禍で私たちが失ったものは数えきれませんが、教えられ、気づかされたこともまた数多くあると思います。その一つは、私たちの社会は見えない人々の様々な働きによって支えられているということです。当たり前のことですが、コロナウイルスの感染が拡大する前の世界において、このことを日々の生活で強く意識していた方はそれほど多くはないと思います。私自身もその一人です。世界中に感染が広がるなか、最前線の働きを担うのは、医師や看護師などの医療従事者の方々だと思います。心身を削って働かれている人たちがいるゆえに、私たちの社会は壊れないでいられる。このことを強く思わされ、そしてまた、深く感謝する日々です。

先日、医療の現場で働かれる方々の苛酷な現実を改めて教えられる新聞記事と出会いました。大阪府の病院で救急救命医として働く医師が読んだ歌集、犬養楓『前線』（書肆侃侃房）を紹介する記事です。この歌集には生と死の間を彷徨う人々と向き合う、緊迫した医療現場の生々しい声が綴られています。感染への恐怖を覚えながら、昼夜問わず働く医師や看護師たちの本音が伝わってきます。歌集に収められている歌のいくつかをご紹介します。

この波を超えたら出そうと退職の書類が三度眠る引き出し

息継ぎの時と場所を探しつつ泳ぎ切らねばならぬ一日

マスクでも感謝でもなくお金でもないただ普通の日常が欲し

私たちが想像する以上に医療の現場の疲労感、閉そく感、深いことを、この短い歌から教えられます。現場の外の安全地帯にいる私たちは、感謝することしかできないもどかしさを覚えながら、医療従事者の方々やそのご家族への偏見や差別を決して許してはいけなく強く思われます。私たちの日常は、見えない誰かの懸命な働きの上にあることを、コロナウイルスの感染拡大が終息した世界になっても忘れてはいけません。このことがこの災禍で私たちが覚えるべきことのひとつだと思えてなりません。先の歌集では次のような歌も収められています。

世の中も体と同じ真っ先に弱き所に痛み現る

コロナ禍で浮き彫りになったのは、この社会で弱い立場に置かれている人々がもっとも痛みを受けている現実です。様々な理由で自ら命を絶った方が以前に比べ増加してしまったことを報道によって知りまします。弱くされた人を思い、彼、彼女らを全体で支える社会が求められています。私たちの共同体は何が欠けているか、どのような共同体を目指すべきなのか、ということも、いまこの時に、私たちに突きつけられている大切な問いだと思えます。

先の聖書の箇所は、私たちが目指すべき共同体のあり方を示したものとされています。この手紙を書いたパウロは、自分が伝道した共同体の人々を体に見立てて語っています。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。

ここでパウロはたとえを用いて、共同体のあり方を説いています。目、耳、手など、それぞれの器官は別な働きをしているが、そのひとつひとつの存在は大切で、反目しているように見えて、実はお互いを必要としていると説明しています。

多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。

このように語っているパウロ自身、彼が中心となつてつくった共同体をどのように形成するべきか、悩んでいたと思います。この手紙の宛先であるコリントは当時、商業上の要地であり、ローマ帝国において重要な街でした。そこは、さまざまな民族、宗教が入り乱れる多文化混合の場でした。そのため、パウロ

たちがつくった共同体にもいろいろな背景をもった人が集まっていたはずです。そのような人たちをひとつにまとめるのは容易ではありません。事実、パウロがコリントの教会に宛てたこの手紙は、その冒頭から共同体内部の不和にやきもきするパウロの心情が語られています。パウロが目を向けるのは、共同体の中にある弱さです。

体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起これば、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

おそらく、私たちの多くは、弱さを切り捨てます。弱い部分を喜ばない。しかし、パウロは、それは違うと断言します。自分は他の体の部分のように優れたものを持っておらず、よい働きもできないので共同体には不要と考える人たちに対して、その意見を否定します。嫌悪感に苦しみ、自分を否定してしまう人たちに、あなたは必要だと述べるのです。体のそれぞれの部分にそれぞれの存在意義があるように、一人一人にもその存在意義がある。弱くされた存在も、なくてはならない部分として選ばれている。そのように、お互いがお互いに向かって言い合える共同体を目指すべきではないか、とパウロは私たちに問いかけているのです。

コロナの災禍を乗り越えた社会でこのパウロの問いかけに応じることができるか。私たちはいま、試されているように思えてなりません。

わたしの恵みは、あなたに十分である。

コリントの信徒への手紙二 12:9



明治38年竣工の東北学院普通科校舎  
(写真提供：東北学院史資料センター)



## 大いなる恵み

大学宗教授 田島 卓

### ルカによる福音書 一章二六〜三八節

26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといつた。28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでどう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いつたいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえますようか。わたしは男の人を知りませんのに。」35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの種類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。37 神にできないことは何一つない。」

38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

十二月に入りました。今年も残すところあとわずか、今月が終わるともう来年になるといふ、十二月の慌ただしさを感じずにはおられない時期でもあります。十二月は、しかし、キリスト教の暦では待降節ですとかアドヴェントという時期になりまして、二五日のクリスマスに向かって準備し、クリスマスを待ち望むという季節でもあります。

世界で最初のクリスマスは、二〇二二年前、計算によっては二〇二五年前かもしれませんが、パレステイナの地の田舎で行われました。田舎の片隅の家畜小屋で一人の男の子が生まれるという、大変に慎ましやかなクリスマスです。しかしその慎ましやかさの中に、世界の歴史の全てを転換させるものが詰まっています。

クリスマスは世界中で祝われるお祭りですし、キリスト教を信仰しているか否かにかかわらず、大きなイヴェントの一つです。聖なるものと俗なるものがここまで一緒くたになって、信仰の有無を問わず祝われている祝祭は他にないのではないのでしょうか。現代のクリスマスに見られる商業主義は確かに好ましいものではないのですが、クリスマスが意味する救いの法外さは、もしかするとあらゆる商業主義を凌駕するようなものかもしれません。というのも、クリスマスという救いの贈与は、ありとあらゆる経済関係、エコノミー、交換関係を破壊するような贈与でありうるからです。無償で、値なしに、究極のものが私た

ちに与えられるという出来事だからです。これは、人間社会の根本的な原理である等価交換の原則を遙かに超えている出来事です。ですから、クリスマスはあらゆる商業主義を凌駕するようなものでありうるのです。

ところで、あまりに豊かな恵みを与えられたとき、私たちはそれを受け止めることができるのでしょうか。意外なことに、私たちは身に余る恵みを受け取ることが苦手なのです。例えば、ちようど日本ではなぜか宝くじの季節でもありますので、宝くじで例えてみましょう。宝くじを買う人は、もちろん宝くじを当てたいと思って宝くじを買うわけですが、宝くじが大当たりした人のその後の人生はそれほど幸せではない、という話をよく聞きます。宝くじが当たったことで、金遣いが荒くなり、そのお金を狙って周りに人が集まり、結果、宝くじが当たる前よりも貧乏になってしまふという例は、一つや二つではないのです。あるいは、運よく出世して、自分の能力以上の地位に着いてしまった人もそうかもしれません。自分の能力が地位に追いついていないと感じる人は、しばしばそのことを誤魔化そうとして、自分の能力がバレンないようにとあくせくし、自分よりも優秀な部下を潰そうとしてしまいます。

これらの例が明らかにするように、実は私たちは自分の身の丈に合うほどの恵みでないと受け入れられないということが多々あるのです。

クリスマスが告げる救い主の誕生、私たちの罪を帳消しにする贖いの到来は全く私たちの身の丈に合わない、大きい恵みです。私たちには何の功績もないにも関わらず、無条件に与えられた、あまりに大きい恵みです。その恵みのあまりの大きさをゆえに、私たちはそれを受け取れきれないのです。

大きな祝福が与えられた人間の、その恵みを受け取れきれないという在り方を告げているのが、ルカに



よる福音書の、今日お読みした箇所前の箇所に現れていました。年老いてから子供が与えられるという恵みが予告されたザカリアは、その法外な恵みを信じられませんでした。彼にはそんな恵みがありうるということは考えられないことでした。自分も妻も、子供のいなまま年老いてしまったというのに、これから子供が与えられるなどということがありうるだろうか。天使の告げた言葉を疑ったザカリアは、子供が生まれるまで言葉が発せなくなりました。

恵みを受け止めきれなかったザカリアと対照的な姿が、今日お読みしたマリアの姿でした。もちろん、マリアが戸惑い、恐れ、そのようなことがありうるのかと思案した様子は描写されています。しかし、最後に彼女はこう受け入れるのです。「お言葉とおり、この身に成りますように。」ここに、大きな恵みを受け取るための、一つの在り方があります。私たちの思い込み、「こうでなければならぬ」という思い込みが砕かれることによって、私たちは初めて大きな恵みを受け取ることができるのです。クリスマスは恵みに対して、私たちがあまりに小さく、卑小なものです。私たちは全く、クリスマスは恵みに対して釣り合うような存在ではありません。しかし、「私にはその恵みは釣り合いません」という一見謙遜の言葉は、私たちがその恵みに見合う何ほどの功績を積むことができるかのような、傲慢さをそのうちに秘めています。そうではなくて、私たちには、クリスマスの恵みに見合う支払いを行うための、ありとあらゆる対価が欠けているという事実を認めるならば、私たちがその恵みに対してできることはただ一つしかないことに気付かされます。私たちはその恵みを値なしに受け取るほかないのです。これがクリスマスの恵みの法外さです。私たちは、比類ない恵み、罪の赦しという恵みを、全く無償で受け取らざるを得ないのです。そして、全く驚くべきことに、罪の赦しという恵みを、値なしに受け取ることが許されているのです。

クリスマスとは、そのような、全くありえないこと、それはつまり奇跡に他ならないわけですが、そのような全くありえないことが起こったのだということに思いを馳せる時期です。そのような、私たちの思いを遥かに超えるクリスマスに向けて、私たちは備えて参りましょう。

あなたの御言葉は、  
わたしの道の光  
わたしの歩みを照らす灯。

詩篇 119 : 105



東北学院幼稚園所蔵クリッペ

(撮影：大久保知美)



## まことの光

大学宗教学主任 藤野雄大

### ヨハネによる福音書 一章六、九節

6 神<sup>かみ</sup>から遣<sup>つか</sup>わされた一人<sup>ひとり</sup>の人がいた。その名<sup>な</sup>はヨハネである。7 彼<sup>かれ</sup>は証<sup>あか</sup>しをするために来た。光<sup>ひかり</sup>について証<sup>あか</sup>しをするため、また、すべての人<sup>ひと</sup>が彼<sup>かれ</sup>によって信<sup>しん</sup>じるようになるためである。8 彼<sup>かれ</sup>は光<sup>ひかり</sup>ではなく、光<sup>ひかり</sup>について証<sup>あか</sup>しをするために来た。9 その光<sup>ひかり</sup>は、まことの光<sup>ひかり</sup>で、世<sup>よ</sup>に来てすべての人<sup>ひと</sup>を照<sup>て</sup>らすのである。10 言<sup>ことば</sup>は世<sup>よ</sup>にあった。世<sup>よ</sup>は言<sup>ことば</sup>によって成<sup>な</sup>ったが、世<sup>よ</sup>は言<sup>ことば</sup>を認<sup>みと</sup>めなかった。

\*この説教はアドヴェント（待降節）の期間になされたものです。

十二月に入り、一段と寒さが厳しくなってきました。また町中では、すっかりクリスマス一色となっています。東北学院大学でも、各キャンパスにおいてクリスマスのイルミネーションが点灯されるようになりました。昨年と同様に、今年もコロナ禍の中で、クリスマスを迎えることとなります。まだしばらくの間は、感染予防に努めなければいけません。希望と喜びをもってクリスマスを迎えたいと願います。

教会の暦では、クリスマスまでの約一か月間の期間は、アドヴェント（Advent・待降節）という特別な期間とされてきました。最近では、輸入雑貨を扱う店などで、アドヴェント・カレンダーという特別なカレンダーが売られるようになりましたので、この言葉をお聞きになったことがある方もおられるかもしれません。このアドヴェントというのは、元々はラテン語で「来るとか、到来する」という意味に由来する言葉です。この意味にも表れていますように、アドヴェントというのは、主イエス・キリストがこの世界にいられた時、ご生まれになった時であるクリスマスを迎えるための準備期間ということになります。

アドヴェントの時期には、多くの教会の中で、クリスマス・ツリーやクララツなどが飾られます。その中でも特徴的なものに、アドヴェント・キャンドルというものがあります。大学の礼拝堂にも飾られています。クリスマスまでの約四週間、毎週日曜日の礼拝のたびに、一本ずつ、アドヴェント・キャンドルを灯していきます。アドヴェントの期間に入って最初の週には、一本、二週目は二本、三週目は三本と灯していき、すべてのろうそくが灯ると、クリスマスの日を迎えることになるわけです。

このようにクリスマス・ツリーにしても、アドヴェント・キャンドルにしても、クリスマスには、「光」がつきものであると言えるでしょう。なぜ、クリスマスには、光がたくさん用いられるのでしょうか。そ

これはクリスマスの本当の意味と深く関わっています。本日(今日)の聖書箇所である「ヨハネによる福音書」には、次のように記されています。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」(一九)。

「まことの光」が世に来て、すべての人を照らすと、「ヨハネによる福音書」には記されています。この「まことの光」とは一体何でしょうか。それは世を救うために来られたイエス・キリストを指しています。「ヨハネによる福音書」では、イエス・キリストが世にお生まれになったことを「まことの光」が世に来たという言葉で表現しているのです。この聖書の言葉に示されているように、この世界の闇の中で、うめき、苦しむ人々は、イエス・キリストに希望の光を見出しました。救い主イエス・キリストがもたらしてくださった希望の光を喜び、感謝すること、それがクリスマスの本当の意味といえます。

光の無い生活を想像できるでしょうか。光は、人間にとって欠かすことができないものです。光について考える時、私はいつも思い出すことがあります。それは、「ツナ缶ランプ」というものです。これは、文字通り、ツナ(シーチキン)の缶づめで作るランプのことです。防災の専門家の方から聞いた話ですが、ツナ缶というのは、災害時には非常に役立つものだそうです。なぜなら、ツナ缶は、非常事態にはまず貴重な食糧になります。しかし、それだけでなく、食べた後に缶に残った大量の魚の油に、布の切れはしなどで作った芯を浸して火をつけると、簡易的なランプになるのだそうです(ノンオイル・タイプのツナ缶ではランプを作ることはできませんのでご注意ください)。わたしは、このツナ缶ランプの作り方を教えてくれた防災の専門家の方が次のように語っていたのを印象深く覚えています。それは、「災害に遭った時、人間にとって必要なものは、水と食料、そして光である」という言葉です。災害時に水と食料を確保

することが命をつなぐのに必要不可欠だということは言うまでもないことでしょう。しかし、それと同じくらい人間の生存には光が重要だということです。このことは、日ごろ、当たり前のように電灯のもとで生活していると意識しない点かもしれません。ところが実際には、光があることは命に直結する問題なのです。なぜ、これほどまでに光が大切なのでしょうか。それは災害に巻き込まれた時、たとえ、たった一本のろうそくの小さな光でも、人の心に慰めや平安を与える効果があるからです。このことは非常に重要な真理を伝えていています。それは光が、人に生きる希望を与える力を持っているということ、そして、人間は希望無しでは生きていくことができない、ということ です。

二〇二一年は、東日本大震災から十年目の節目の年にあたっています。あの震災の時には、この東北地方を中心に被災地の広い範囲で電気が止まりました。ライフ・ラインが寸断され、多くの人が暗闇の中で地震や津波の恐怖と闘うことを余儀なくされました。その時、非常用のろうそくの光や復旧した電灯の光が、多くの人に慰めや、安心、そして希望を与えました。また現在では、世界中でコロナ・ウイルスの感染が猛威を振るっています。多くの尊い人命がコロナ・ウイルスによって奪われました。コロナ・ウイルスの拡大によって、経済的な困難に置かれている人もいます。歴史的パンデミックの中で、世界中の人が、さまざまな不安や恐怖にさらされ、疲れ果てています。まるで終わりの見えない暗闇の中を過ごしているようなものを感じられます。しかし、そのような時だからこそ、「まことの光」であるキリストが世に生まれたというクリスマスの本当の意味を改めて思い起こし、希望をもってクリスマスを迎えたいと願います。



## 常に待っていてくださる神

大学宗主任 渡邊有美

### ゼカリヤ書 四章六〜一〇節

6 彼は答えて、わたしに言った。

「これがゼルバベルに向けられた主の言葉である。

武力によらず、権力によらず

ただわが霊によって、と万軍の主は言われる。

7 大いなる山よ、お前は何者か

ゼルバベルの前では平らにされる。

彼が親石を取り出せば

見事、見事と叫びがあがる。」

8 また主の言葉がわたしに臨んだ。

9 「ゼルバベルの手がこの家の基を据えた。

彼自身の手がそれを完成するであらう。



こうして、あなたは万軍の主がわたしを

あなたたちに遣わされたことを知るようになる。

<sup>10</sup>誰が初めのささやかな日をさげすむのか。

ゼルバベルの手にある選抜かれた石を見て

喜び祝うべきである。

その七つのものは、地上をくまなく見回る主の御目である。」

皆さんは、何かをしようと思ひ立ち、計画倒れしたこと、または途中まで頑張ったけれども、放棄したことはありますか。或いは、着手して大分、時が経ったけれども、まだ目標が遙か彼方のように思えて、いつまで経っても先に進んでいないような思いをしていますか。或いは、自分なんかには到底出来ないこと、やはり無理だったのだ、と諦めようとしてはいませんか。さらに、こんな小さなことしかできない自分が、何の役に立つのだろうかと思ったりしてはいませんか。

人間のはじめの一步が、よちよち歩きのように、神は、「誰が初めのささやかな日をさげすむのか」(四：一〇)と言われる方です。最初の小さな一步でも神の目には、重要な一步だからです。「詩編」(一：二～三)には、以下のように記されています。「主の教えを愛し その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び葉もしおれることがない。その人のすることとはすべて、繁榮をもたらず」。つまり、主の水のほとりに植えられた木には、時がくれば実がなる、で

も時を待たなければ、その実はなりません。

皆さんはどのような仕事につきたい、どういう人生を送りたいかなど、色々と考え、分からなくて悩み、不安になることもあるかも知れません。学生時代は、自分がどういう人間なのか、何をしたいのか、どのように社会に貢献できるか、などと自由に模索できる時です。社会人になってからも模索を続けることは可能ですが、そのために割ける時間は極端に少なくなり、仕事量によっては、忙しすぎて考える暇もなくなることもあります。ですから、好きなことを精一杯、やることはやった上で楽しむことができる時期として、大学生の時代は、重要な時です。

自分に自信がない方もいらっしやるかも知れません。しかし神は、私たちのことを「似姿につくり」「良かった」「愛するもの」と呼ぶ神です。神は、以下のように言われるからです。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支

配させよう。』」（創世記）一：二六）

「わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛し、あなたの身代わりとして人を与え、国々をあなたの魂の代わりと

する。』（イザヤ書）四三：四）

「恐れるな、わたしはあなたと共にいる。』（イザヤ書）四三：五）

「彼らは皆、わたしの名によって呼ばれる者。わたしの栄光のために創造し形づくり、完成した者」

（イザヤ書）四三：七）

人生には様々なことがあります。落ち込んだ時、寂しい時、どうしたら良いか分からない時には、天地万物を創造された神の目に私たちはどのように映っているかを思い出し、力を得て歩み続ける必要があります。神は、私たちが重荷で押し潰されそうになる時、助けてくださるお方です。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（「マタイによる福音書」十一・二八～三〇）

ですから、辛いことがあった時には、「神様、私の重荷を負って下さい。そして、代わりにあなたの軛を負わせてください。その軛は軽いからとあります」と祈ることが大切です。神は全能の神であるので、たとえそれが何億人分であろうと、その重荷を負うことに制限はありません。実際に、私たちが祈る前から、全てをご存知なのが、神、であります。

「主よ、あなたはわたしを究め わたしを知っておられる。

座るのも立つのも知り 遠くからわたしの計らいを悟っておられる。

歩くのも伏すのも見分け わたしの道にことごとく通じておられる。

わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに 主よ、あなたはすべてを知っておられる。

前からも後ろからもわたしを囲み 御手をわたしの上に置いていてくださる。

その驚くべき知識はわたしを超え あまりにも高く到達できない。」（「詩編」一三九：一～六）

神は常に、私たちが神を求めることを待っておられる神なのです。そして共に歩みたいと思ふあまり、

「受肉」して私たちと共に歩んだ、インマヌエルの神でもあります。

『聖書』を通じて、神は私たちのことを決して見捨てないと語られています。

「主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない。恐れてはならない。おのいてはならない」（「申命記」三一・八）。

ですから、私たちは、私たちのことを待っていてくださる神に立ち帰り、また力を得て歩んでいきましよう。私たちも神に期待して待つ中で、きっと新たな一歩が開けてくることを信じています。

「まことに、イスラエルの聖なる方 わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って 静かにしているならば救われる』（「イザヤ」三〇・一五）

愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます。

コリントの信徒への手紙二 13：11



東北学院大学土樋キャンパス ラーハウザー記念礼拝堂

(撮影：広報課)



## コロナ時代こそ礼拝そのもの

理事長特別補佐 宗教センター担当 鐸 木 道 剛

ルカによる福音書 一二章一九〜二〇節

『<sup>19</sup>さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』<sup>20</sup>しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。

ローマの信徒への手紙 一四章八節

<sup>8</sup>わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。

コリントの信徒への手紙 一〇章三一節

<sup>31</sup>だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

この二年はコロナ伝染病で大変な日々でした。二年間の自粛生活でした。その間、様々なことが起こりました。時代も世代も変わったかのようです。知らなかった技術であるZoomも、日常茶飯となりました。Zoomは、まずは遠隔授業のためでしたが、学会の例会や研究会にも使われ、実際に足を運ばなくても参加できる、なかなか便利ということにも気づきました。

「不要不急」と言う言葉が跋扈しました。不要不急ことはすべて後回しとされ、それで「芸術」は不要不急か、さらには「礼拝」は不要不急かとの議論もありました。コロナが理由で止めるのなら、不要不急であったこととなります。コロナ伝染病は生命の危機。だからコロナゆえに礼拝を止めると言うことは、礼拝より生命が大事ということになります。しかしそもそも礼拝は、生死を超えた超越に関わるのではなかったでしょうか？だからコロナで礼拝を止めたとすると、コロナが終わった時には、礼拝の立て直しと共に、なぜ礼拝を止めたのかの説明が必要です。しかしその際の理屈は？

ここで、その理屈を少し書いておきましょう。コロナで礼拝を止めるのは、キリスト教の現実肯定のゆえです。礼拝は神様への感謝と賛美ではありますが、また神様における連帯の確認でもあります。教会成立の出发点です。それはイエス様との出会い、つまり地上の天国の再現です。天国の再現つまり表象(representation)ですから、それは天国そのものではなく、地上のものはすべて過ぎゆくものです。しかし神が受肉することによって、現実には神化(聖化)されました。現実には過ぎゆくものですが、神とつながっているのです。だから地上での努力は意味があります。地上で、できるだけ良き世界、天国を構築する。それがキリスト教です。そういう意図であっても歴史的には失敗(十字軍や植民地主義)も多かったことは事実です。今後また失敗することもあるかもしれませんが、それは避けねばなりません。

つまり、受肉によってこの現実世界を肯定するのがキリスト教です。これを現実の「神化」あるいは「聖化」と言います。神の受肉、すなわち神の「無化（ケノーシス）」による我々の「神化（テオーシス）」あるいは「聖化」です。現実の中で神の国を表すこと、これが我々の務めです。そのためには現実の中で生きねばなりません。伝染病を避けるのはそのためです。「神のより大いなる栄光のために（*pro majorem Dei gloriam*：イエズス会の標語です）」、それを現実世界で実現するために礼拝を中止するのは、そして礼拝は、受肉による現実肯定の確認でもあるのです。それがなければ、現実は無意味です。「どうせ消滅する世界なのだから、せいぜい楽しもう」（『コヘレトの言葉』九・七・九、『コリントの信徒への手紙一』一五・三二）と言う快樂主義しか出てきません。だから学問の場に礼拝は必要なのです。西洋の大学、アメリカでも大学はどこでも、ハーバード大学でも立派な礼拝堂がいくつもあります。日本でも湯島の聖堂は孔子廟だし、また備前の閑谷学校にも孔子廟がありました。それと同じです。現実は超越に依らずには意味が与えられないのです。現実を現実のまま肯定するのは偶像崇拜です。お金を金ゆえに肯定することです。これはわかりますね。そして命を命ゆえに肯定するのも偶像崇拜になります。殺虫剤から逃げ回るだけのゴキブリは、多分、命を命ゆえに肯定しているのでしょう。

そういうなかで、月に一度、第三水曜日に市民に公開して行っている水曜礼拝は、しばらく対応を迷っていました。が、YouTubeで可能と言うことで二〇二〇年の九月から再開しています。それとともに『水曜通信』も月一度の発行を再開し、コロナ以前と同じ活動をしています。

しかしコロナは日常生活をストップさせるもので、礼拝もそういう状況の中でどうするか迷っているという風にコロナを位置付けていましたが、今年の六月くらいから考え方が変わりました。



コロナは我々を生と死を考える原点に返すもので、まさに礼拝の時なのです。「メモメント・モリ（死を覚えよ）」の時であることに気づきました。

そう考えることになったきっかけは忘れましたが、ぼく自身が五月に胃癌が見つかって、六月に手術したことがきっかけなのかもしれません。入院は今までの人生で初めて、大病も初めてでした。子供の時は、体が弱くて、引きついたりしましたが（脳膜炎にもなったと聞きます）、小学生以降は極めて健康でした。今回、人生で初めての手術で体が動けなくなると、腸閉塞の可能性もあって苦しんだ夜もありました。しかし無事、落ち着いて、六人部屋の病室で、やれやれと爪など切っているときに気づきました。トルストイが『懺悔録』の中で「東洋の寓話」として書いていたことです。広野の中で猛り狂った野獣に襲われた旅人の話です（『トルストイ全集』第十四巻、中村融訳、河出書房新社、一九七三年、三五八頁）。

野獣から逃げ込んだ井戸の底には竜がいて、這い出ることも、井戸の底に飛び降りることもできなかった旅人が目の前にある灌木に溜まっている蜜を舌で受けて舐めている。つまり目先の快樂で、差し迫った悲劇を忘れていってしまう話です。これはビザンチンの神学者ヨハネス・ダマスケヌスも記している話（*St. John Damascene, Barlaam and Josaph, Loeb Library, 1972, p.189*）で、この八世紀のイコン論成立に多大な貢献をした中世ビザンチン最大の神学者がこの逸話を記しているのです。そしてこれは仏教説話に由来するのだそうです。我々の日常生活は、まさにこれです。

古代ギリシア・ローマの彫刻に、『刺（とげ）を抜く男の子』の彫刻があります。「スピナリオ（Spinario）」と言って、たくさんのコピーが作られています。この彫刻にはそういう意味があるのではないかと思いつきました。この彫刻は、日常を、それも最も些細な刺抜き行為を描いて、過ぎ去って

く日常と、死を暗示しているのです。ギリシア美術、怖るべしです。文献的証拠があれば、あるいは虚無的なストア派の文章を引用して、論文が書けます。

ぼくは死ぬことは常に念頭に置いて生きてきました（そのつもりです）。高校生の時に脳腫瘍にかかったと思込んで、ぼくは死ぬんだと思った時に、死ぬことがわかっても意味を失わない生き方をしようと決心しました。それで五月の説教でそういう話をしたところでした。それをぼくは誇らしげに言うものだから、今回の胃癌の発見は、神様がぼくに、死が間近にあることを実際に体験させてくださったのかもしれない。

死を念頭において生きる、それはスピノザが「永遠の相のもとで」と言い、川端康成が「末期の目」といったように、現実を神から見て相対化する生き方です。しかし既に記したように、それだけだと旧約聖書です。新約聖書つまりキリスト教はそこでは止まりません。現実の物質世界は過ぎゆくものだけでも、神が肉体つまり物質となることによって、物質世界は神化（聖化）されたのです。四世紀のアタナシオスと言う通りです。

それを確認するのが礼拝です。礼拝もZoomで可能です。ランカスター神学校は毎週木曜日と土曜日にZoom礼拝をやっています。聖餐式もやります。



『刺（とげ）を抜く男の子（スピナリオ）』

紀元前1世紀 ブロンズ 像高：84cm

ウフィツィ美術館、フィレンツェ

しかし地上の天国の体験は、やはりZoomではなく集まって初めて可能です。音楽会がやはり実際の演奏をみんな体験することが大事であることと同じです。ぼくはペテルブルグのニコライ教会での礼拝で、教会堂の空間全体がそのままそっくり天につながっている体験をしました。ニコライ教会のある公園と道を隔てて、その向かいには、かつてバレエのルドルフ・ヌレエフが踊り、今もゲルギエフが指揮をするマリインスキー劇場があります。礼拝も芸術体験と同じなのです。芸術体験の原点こそ、そこにあります。イギリスの神学者のフォーサイス（一八四八―一九二一年）も、「見える神」つまり「受肉」を言うキリスト教ゆえに芸術が成立すると書いています（Peter Taylor Forsyth, *Religion in Recent Art*, 1889, p.156）。我々がよく知っている芸術も学問も、つまり生きること全体がキリスト教によって支えられているのです。東北学院のキャンパスの中心に、必ず礼拝堂があるのはそういう意味なのです。それは、「礼拝とキリスト教教育を不変のこととして実施する」東北学院教育の基本方針です。抽象的で形式的ではありません。礼拝は実際に我々の日常生活と学問を支えているのです。

## 幼子を抱いたとき



日本基督教団 登米教会 牧師 佐々木 栄悦

ルカによる福音書 二章二五〜三二節

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが、霊に導かれて神殿の境内に入ってきたとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

30 わたしはこの目であなたの救いを見ただからです。

31 これは万民のために整えてくださった救いで、

32 異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

はじめに

二〇二一年のクリスマスを皆さんとお祝いできますことを感謝いたします。

二〇二一年にクリスマスを祝う時、二〇二一年という年はどのような一年でしたでしょうか。二〇二一年は、コロナ禍の一年だったと私自身は振り返ります。クリスマス礼拝をこのようにインターネットで守るといえるのは、新型コロナウイルスに感染しないようにするためですから、新型コロナウイルスのことはどうしても頭からはなれません。

日本で新型コロナウイルスで亡くなった方の数をインターネットで調べましたら、十一月十九日現在で一八三四人の方が亡くなっていました。この数は十年前に起こった東日本大震災の死者と行方不明者の数を合わせた数（一八四二五人）とあまり変わりません。

新型コロナウイルスの脅威の中で、「死」というものと向かい合って過ごした方もいらっしゃると思います。新型コロナウイルスによって翻弄されたことは、ワクチンを摂取し、治療薬ができれば、それでも問題は解決したというわけにはまいりません。この苦しみの経験から何を学んだのかが問われます。「死」というものに向き合う機会を与えられたのですから、今年のクリスマス礼拝では、すべての人にやってくる死というものと向かい合いながら、この死すべきもののために与えられた救い主の降誕を祝う意味を分かち合いたいと思います。

## クリスマス物語と「死」

救い主が生まれるということと「死」というものは無関係なもののように思われます。「誕生」というおめでたいことと「死」という悲しいものは、水と油のように一緒になれないように思います。しかし、福音書には、救い主の誕生という光の部分ばかりではなく、人間の死という陰の部分も記されています。たとえば、マタイによる福音書の二章一六節によると、救い主が誕生するという中で、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の赤ちゃんがヘロデの命令によって殺されました。

今日、読んでいただいたルカによる福音書の二章二五節以下には、救い主を抱くとき自分の「死」を受け入れていたシメオンという老人の姿が描かれています。死は、だれにとっても避けられないものであり、同時にだれにとっても考えたくもない現実です。それなのに、救い主が生まれたからといって死を受け入れられるのはなぜなのでしょうか。

福音書によると、シメオンは救い主に会うまでは決して死なないとお告げを聖霊から受けていた人でした。シメオンが聖霊に導かれて神殿に参りました。そこへ「幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして」ヨセフとマリアがイエス様を神殿に連れてきました。シメオンは、幼子イエス様を抱いて神様をたたえてこう言いました。「主よ、今こそあなたは御言葉どおり　この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。」

救い主を抱く

イエス様を抱いて、なぜ「この僕を安らかに去らせてくださいます」と言えたのでしょうか。イエス様

を抱くということなのでしょう。

母マリアが幼子イエス様を抱いている様子を、ラファエロも描いています。この絵からは、平安ばかりではなく、なにか気高いもの、気品のようなのが伝わってきます。

私は、イエス様を抱く母マリアを描いている大理石の彫刻があることも知っています。ミケランジェロの作品で一般に「ピエタ」と呼ばれている作品です。母マリアに抱かれているのは、幼子イエス様ではありません。十字架から引き下ろされた三十歳ぐらいのイエス様です。幼子イエス様を抱くとき、だれがこの幼子が三十歳ぐらいで十字架に付けられて死ぬことを予想できたでしょうか。

聖書は、イエス様の十字架には意味があると書いています。たとえば、第一ヨハネの手紙四章一〇節にて次のように書いています。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

救い主の十字架の死に「愛」がある、と聖書は語ります。幼子イエス様を抱くとき、そして十字架のイエス様を抱き上げるとき、わたしたちは神の愛を抱いているのです。では、「神の愛を抱く」とは、どういうことでしょうか。それは、あなたが神に愛されていることをあなた自身が受け入れること、神に愛されているという事実を自分も強く抱きしめることです。

だれにでも愛されたいという思いがあります。自分はそのようなことはないという人でも、必ず愛されたいという無意識の世界があります。人は、パンだけではなく、愛されるということがなければ生きていきません。あなたを愛している人がいます。そしてあなたを愛している神様がいます。それが二千年前にユダヤのベツレヘムにお生まれになり、ゴルゴタの丘で十字架につけられて死んで三日目によみがえり、今も

見えない姿で共にいてくださる救い主イエス様です。

## 大学生と死

ところで、死について考えることなど、大学生にはまだまだ関係ないと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。皆さんの中には身近な方が亡くなるということを経験して自分なりに死というものと向き合った経験のある方もいるでしょう。しかし、この世の中には、自分は死を経験して知っている、という方はひとりもいません。ここで考えていただきたいのは、他人の死ではなく、自分自身の死についてです。

かつて上智大学で「死の哲学」という講義をもっていたアルフォンス・デーケン神父の著書に「死とう向き合うか」という本があります。その中に演習の様子が紹介されています。演習では、二つの課題がだされます。一つは、もしもあと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすかということとを小論文にまとめることです。もう一つは大切な人への「別れの手紙」を書くことです。大切なことは、自分の頭でじっくり時間をかけて考えて書くことです。そうすることによって、マルとかバツでは採点できない次元の問題、一人一人にとって大切なことが明らかにってきます。

大学生が自分の死についてどのようにまとめるのだろうかと思えます。たとえば、次のような例が載っていました。「私は肉体的には死にますが、精神的にはお父さん、お母さんと一緒です。どうかわたしの死を、死と思わないでください。私は死によって、新しい生を受け取るのです。常に前向きに進んでほしい。そして、私の死の経験を通して、自分の生き方を見つめなおしてください。」

〔恋人へ〕 私に、こんなに人を愛せることを教えてくれたあなた。人間は決してひとりではないという



ことを、身をもってわたしに教えてくれたあなた。どうか悲しまないで。

私は最後まで、わたしらしく生きるつもりだから。今まで、本当にありがとう。」

デーケン神父は次のように書いています。「死を目前にした状況に自分を置いてみて、初めて今生きている生の貴さを本当に理解し、その深い意味を改めて考えだせるのではないのでしょうか。それは現実に死が迫ってくるための予行練習でありながら、そのまま現時点における生の再発見というべきものです。」

コロナ禍に翻弄されながらも、クリスマスに私たちは死と向かい合い、生きることの深い意味を見いだせるヒントをいただきました。特別な事故などが無い限り、だれでも「明日生きよう」と意識しなくても生きています。しかし、自分の人生の死を意識し始めると、人は限られた人生の一日を、それぞれの価値観にそって有意義に生きようします。そして限られた人生の日々を「私は生きる」ということを意識して生活すると、生き方が変わります。それはひとつの誕生のようなものです。

では、クリスマスにこの死と向かい合うというのはどういう意味があるのでしょうか。イエス様を思い浮かべてください。あなたを愛し、十字架の上で命をささげた救い主を思い浮かべてください。そして、十字架の上で示された神様の愛を抱きしめてください。

「ここに愛がある」と聖書が指し示す十字架の出来事を心に留めて、今まであまり意識していなかった「私は生きる」ということを意識化して、新しい歩みを始めてみてください。意識化された「生きること」は「愛すること」ですから、漫然として過ごすことはできません。そこには新しい発見があり、新しい世界が広がります。

クリスマスの時、あなたに差し出されている神様の愛を受け取って、抱きしめてください。「私は生きる」という意識をもって、あなたの大切な人や大切な何かを愛しながら、自分が生きていることを喜び、感謝しながら歩んでみてください。神様はとても素敵なプレゼントをあなたにくださいます。

皆さんの新しい命に満たされた一日一日の歩みが豊かに祝福されますように、お祈り申し上げます。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。  
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

ヨハネによる福音書 3：16



多賀城キャンパス礼拝堂

(撮影：広報課)

二〇二一年度 東北学院公開クリスマス礼拝説教

光のあるうちに



日本基督教団 仙台南伝道所 牧師 佐藤 由子

イザヤ書 一一章一、二、一〇節

1 エッサイの株<sup>かぶ</sup>からひとつの芽<sup>め</sup>が萌<sup>も</sup>えいで  
その根<sup>ね</sup>からひとつの若枝<sup>わかえだ</sup>が育<sup>そだ</sup>ち

2 その上<sup>うへ</sup>に主<sup>しゅ</sup>の霊<sup>れい</sup>がとどまる。

知恵<sup>ちえ</sup>と識別<sup>しきべつ</sup>の霊<sup>れい</sup>

思慮<sup>しりよ</sup>と勇氣<sup>ゆうき</sup>の霊<sup>れい</sup>

主<sup>しゅ</sup>を知<sup>し</sup>り、畏<sup>おそ</sup>れ敬<sup>うやま</sup>う霊<sup>れい</sup>。

10 その日<sup>ひ</sup>が来<sup>く</sup>れば

エッサイの根<sup>ね</sup>は

すべての民<sup>たみ</sup>の旗印<sup>はたしるし</sup>として立<sup>た</sup>てられ

国々<sup>くにくに</sup>はそれ<sup>それ</sup>を求<sup>もと</sup>めて集<sup>つど</sup>う。

そのとどまるところは栄光に輝く。

ヨハネによる福音書 一二章二七、二八、三五、三六節

27「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。28父よ、御名の栄光を現してください。すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」

35イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。36光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」

【主イエスの誕生／十字架の時の為に】

私たちは、何の為に、この世界に生まれたのでしょうか。

クリスマスを迎える度に、私たちは、イエスさまの誕生物語を聞きます。クリスマスの讚美歌や、町に流れるクリスマスの音楽も、その歌詞をよく聞いてみると、イエスさまの誕生物語を語っています。そしてそれは、とても喜びに溢れた、あたたかい物語であり、イエスさまの誕生は、大きな希望と喜びに満ち

ています。

しかし、「何の為に、イエスさまがこの世界に生まれたのか」と考えてみますと、それは、クリスマス誕生の喜びやあたたかさとは、かけはなれた別の一面があることに気づかされます。

ヨハネ福音書一二章二七節では、「私はまさに、この時の為に来た」と語るイエスさまがおられます。「この時」とは、「十字架の時」のことです。つまりクリスマスは、イエスさまの十字架の道への始まりでもあります。イエスさまは、「十字架の時」のために、この世界に生まれました。

そしてイエスさまは、この「十字架の時」を目前に、「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。」と、重い使命との葛藤を言葉に表わされました。

私たちも、自分の思いとはまったく関係のないところで背負うことになった重荷や使命があるかもしれません。「自分でなければ良かったのに」「なぜ自分なのだろう」と問いかけ、その問いかけの後には、しばしば悲しみの言葉が続きます。

しかしイエスさまは、「わたしはまさにこの時のために来たのだ。」と言葉を続けられました。自分に与えられた「十字架の道」こそが、自分にしかできない、自分が生まれた目的なのだと、覚悟を新たにされました。そしてイエスさまは、「父よ、御名の栄光を現してください。」と、天の父なる神様に祈りました。

#### 【御名の栄光／救いの恵み、約束の実現】

「御名」という言葉は、父なる神様のことを指している時と、御子であるイエスさまを指している時があります。どちらの場合も、ヨハネ福音書の大切なメッセージが語られる場面です。「御名の栄光を現わ

す」とは、父なる神様が御子イエスさまに与えた業を成すことであり、父と子が「一つ」であることを現わすことでもあります。

「御名の栄光を現わして下さい」との祈りは、「あなたの想いと私の想いが一つになりますように」という祈りであり、「あなたの栄光の業が、私を通してなされますように」という祈りでもあります。そしてこのイエスさまの祈りは、私たちも自分の祈りとして祈ることのできる祈りです。

また「栄光」とは、私たちにとっては輝かしい出来事や勝利を指していることが多いと思いますが、ここで語られる「栄光」とは、「十字架の時」を指しています。イエスさまがこの地上に人として誕生し、十字架の道を歩み始められる事は、神様の御心にかなうことでした。なぜなら「十字架」が示すものは、「死」ではなく「死からの勝利」であり、それは神様だけが行うことのできる栄光の業だからです。

「栄光」とは、イエスさまが、この世界にお生まれになったことによって与えられた「救いの恵み」です。イエスさまは「十字架の時」において、父なる神様の「救いの約束」を成し遂げられました。

#### 【エサイの根より／罪と死に対する勝利】

神様の救いの約束は、何千年も昔からの約束です。旧約聖書は、その全体を通して、救いの約束を語っていますが、イザヤ書十一章においても、この救いの約束が記されています。

エサイ、またはエッサイとは、イスラエル王国の、栄光の時代の王様であったダビデ王の父親です。マタイ一章には、イエス・キリストの系図が記されていますが、エッサイはボアズとルツの孫にあたります。そしてルツ記を読むと、エッサイは決して裕福な家系や、王様が誕生するような家系に生まれていないこ

とが分かります。エッサイは、小さなベツレヘムの町の一人の羊飼いでした。ダビデは、その一番末の子どもであり、夜通し羊の番をするような、人々が思い描いていた王様からは、かけ離れたところにいました。

しかし神様のご計画は、いつも人々の思いを遙かに超えたところにあります。ダビデは、王様として選びだされました。そしてダビデ王の時代から何百年という時が過ぎ、イスラエル王国が滅びを迎え、誰もがエッサイの家系も途絶えると思われたその時、神様は、そのエッサイの株から新しい芽を出させ、その根からひとつの若枝を育てると約束されたのです。

この救いの約束の成就が、イエスさまの誕生です。イエスさまは、私たちの悩みを助け、誰も克服することのできなかつた「罪」と「死」から、私たちを救うために、この世界に生まれて下さいました。

讚美歌「エサイの根より」においても、この救いの約束の喜びが歌われています。もとの歌詞においては、イエスさまが、暗闇を追い払う透き通る光であること、まことの人にしてまことの神であること、私たちのすべての悩みを助け、罪と死から私たちを救う方であると歌っています。また讚美歌「もろびと声あげ」においても、イエスさまが私たちの死の恐れを追いやる方であることが歌われています。クリスマスは、この救いの約束が成されるという福音、「良き訪れ」が伝えられる喜びの時です。

しかしいつの時代であっても、この救いの計画に戸惑う思いがあります。それは、この神様のご計画が、自分の思い描いていた計画とは違うからではないでしょうか。私たちは長い間、何かを強く思い続けると、その自分の思い以外のことを受け入れることが、とても難しくなってしまう。しかし救いの道は一つです。私たちは、この驚くべき救いの恵みを受け取らないままで良いのでしょうか。



【光のあるうちに、光を信じなさい】

頑なな私たちの心に、イエスさまは静かに語りかけて下さいます。

「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。闇にとらえられることがないように、光のあるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい (12:35-36)。」

光とはなんでしょうか。

三六回目となる今年の SENDAI 光のページントは、「Step for NEW HOPE (新しい希望への歩み)」というテーマであるそうです。私たちは、灯る光に、愛しい人、愛しい町を想い、希望を探します。

また東北学院においては、建学の精神である「地の塩、世の光」、「命・光・愛 (Life, Light and Love for the World)」、また校歌や応援歌にも「光」という言葉が使われています。

光は、イエス・キリストであり、神の言葉です。

光は、救いの道であり、真理であり、命です。

光は、私たちに与えられた神様の恵みであり希望です。

聖書は、光が私たちと共にあるのは、ほんの少しの時間だけであると語ります。しかしまた同時に、この光のあるうちに、私たちが光と共に歩むならば、闇が私たちをとらえることは決してないと約束しています。

この世界は、刻一刻と暗闇に覆われていきます。気づけば、自分が暗闇の中にいることさえ分からなくなるような時代に、私たちは生きています。闇が闇であることに気づくためには、輝く光が必要です。輝

く光は、今の時代を生きる私たちにとっては、まぶしすぎるかもしれません。しかしイエスさまは、次のように語られました。

「わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た。わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである（12:46-47）。」

### 【地の塩、世の光／共に担う使命】

イエスさまの光は、裁きではなく、救いです。イエスさまは、私たちの弱さを責める方ではありません。イエスさまの光は、私たちが光の子へと変える「力」があります。この世界には、まだ、光が輝いていません。あと少しの時間、私たちの中には光があります。

クリスマスは、父なる神様が、私たちのために、神様の独り子であるイエス・キリストをこの世界へと遣わして下さった恵みを覚える時です。イエスさまが「十字架の時」の為に、この世界に生まれて下さったからこそ、クリスマスには「希望」があります。何もないように見える、その場所にこそ、花は咲くのです。

闇の中に大いなる光が輝く、このクリスマスの時、私たちは、「光のあるうちに、光を信じなさい」と語られるイエス様の呼びかけに応える者とされたいと願います。そして主の溢れる命と光と愛を受け取って、「地の塩、世の光」としての大きな使命を共に担い続けるものでありたいと、心から祈り願います。

## あとがき

今回も、各学校の先生方の御協力により、『東北学院説教集』「ひかりの中へ」を上梓することが出来たことを心より感謝いたします。

またこの説教集の編集のために、東北学院宗教センターの三人のスタッフに加えて、美術家の御協力を得て、何度も編集会議を重ねることが出来たことも幸いでした。

この会議で特に話し合われたことは、本説教集を目にした人が、開いて読んでみたいという思いが生じるように工夫しようという点でした。読者は幼稚園の保護者から生徒、学生たち、教職員、一般の人々を対象にしています。忌憚のない御意見、御感想を頂けると幸いです。

今回の第三号からは、毎回一つのテーマを掲げて、それに関する説教を執筆者の先生方から寄稿していただいて、読者の皆様がそのテーマをめぐる聖書から様々な示唆や解説を受け取れるように編集したいと考えています。

今後ともに、皆様の温かい御支援をお願い申し上げます。

ひかりにあゆめよ、さらばくらき

谷間をゆくとも、やすくぞあらん

## 執筆者一覽

幼稚園 園長

中学校・高等学校 宗教主任

中学校・高等学校 聖書科教諭

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

院長・学長・宗教センター所長

大学宗教部長・宗教センター主任

大学総合人文学科長

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

理事長特別補佐 宗教センター担当

日本基督教団 登米教会 牧師

日本基督教団 仙台南伝道所 牧師

島内 久美子

松井 浩樹

高安 ナ

西間木 順

大西 晴樹

野村 信

川島 堅二

出村 みや子

原田 浩司

木村 純二

吉田 新

田島 卓

藤野 雄大

渡邊 有美

鐸木 道剛

佐々木 栄悦

佐藤 由子

# 東北学院礼拝説教集

第二号

二〇二二年三月三十一日発行

発行責任者 院長・学長・宗教センター所長

大西 晴樹

編集責任者 大学宗教部長・宗教センター主任

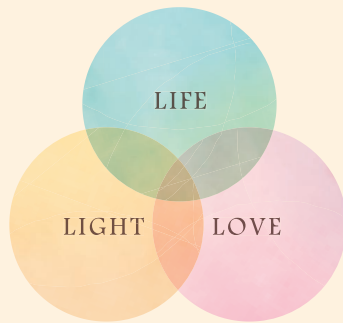
野村 信

印刷・製本 株式会社 阿部紙工

問い合わせ先 東北学院宗教センター

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一―三―一

☎〇二二・二六四・六五五八



2022年3月31日  
東北学院宗教センター発行